

住宅火災・放火火災の実態

(平成30年中)

東京消防庁
防災部防災安全課

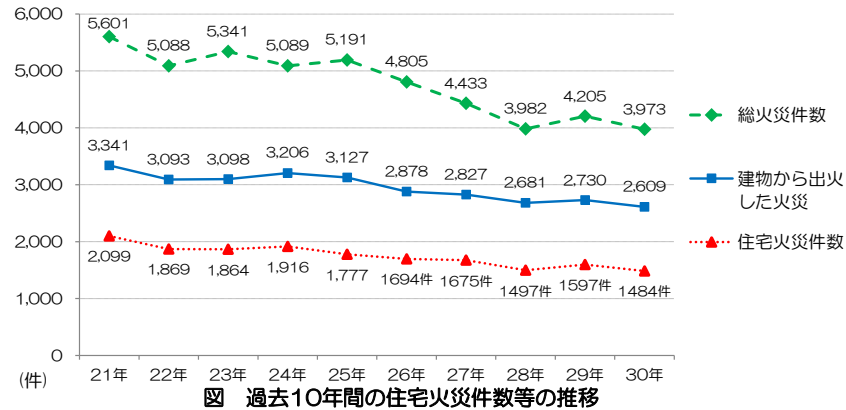
住宅火災・放火火災の実態の概要（平成30年中）

※住宅火災の死者・負傷者は自損によるものを除く

第1章 住宅火災の実態

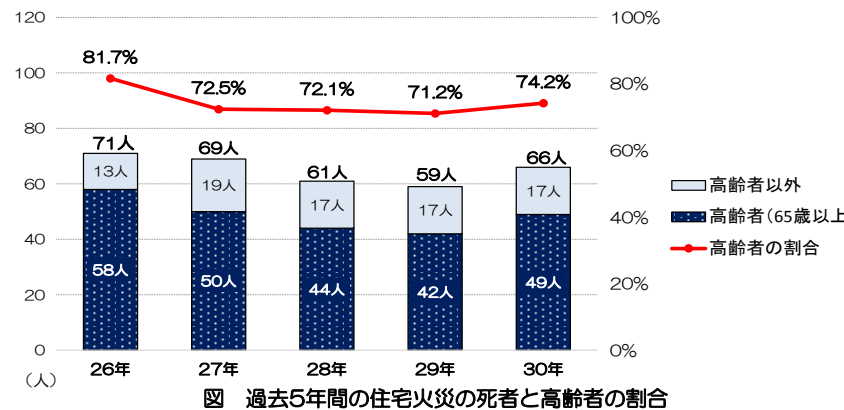
住宅火災の件数

火災件数は減少傾向であるが、総火災件数並びに建物から出火した火災件数に占める住宅火災件数は横ばいである。



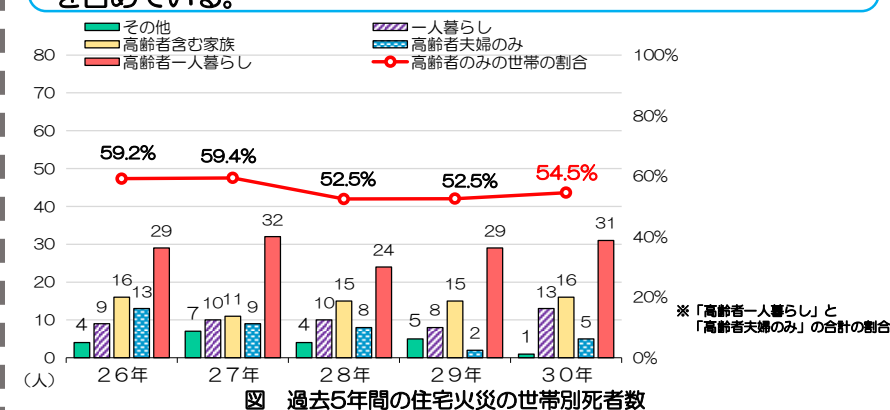
住宅火災の死者

住宅火災の死者数はほぼ横ばいであり、高齢者の死者は7割以上と高い割合で推移している。



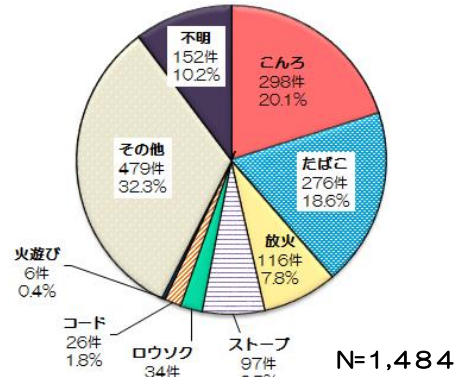
住宅火災の高齢者の死者

住宅火災の死者を世帯別で見ると、「高齢者一人暮らし」で最も多く発生し、「高齢者夫婦のみの世帯」と合わせて半数以上を占めている。



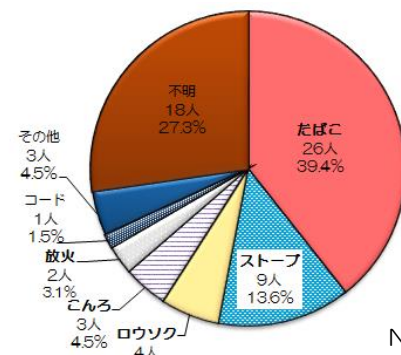
住宅火災の出火原因

住宅火災の出火原因は、「こんろ」によるものが最も多い。



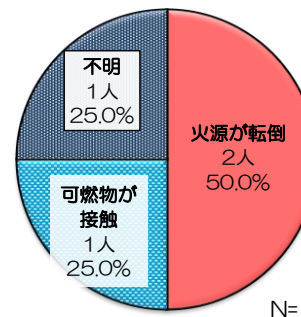
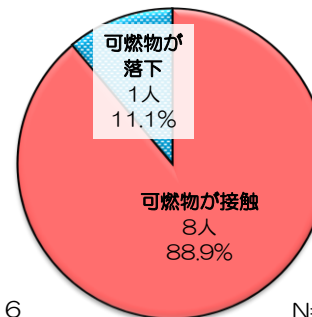
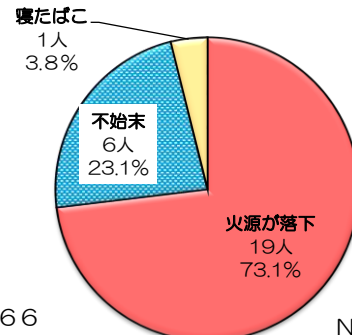
死者が発生した住宅火災の出火原因

死者が発生した住宅火災の出火原因は、「たばこ」によるものが最も多い。



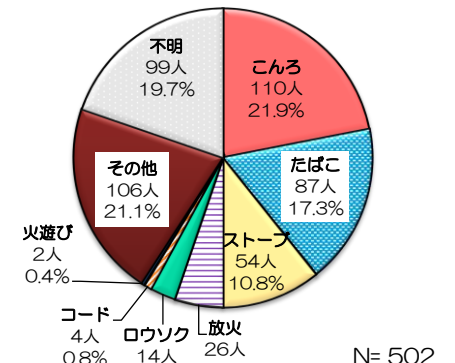
死者が発生した住宅火災の主な出火原因の発生経過

主な出火原因の発生経過をみると、「たばこ」は寝たばこ等による火種の落下、「ストーブ」は可燃物が接触、「ろうそく」は火源が転倒したものが最も多い。



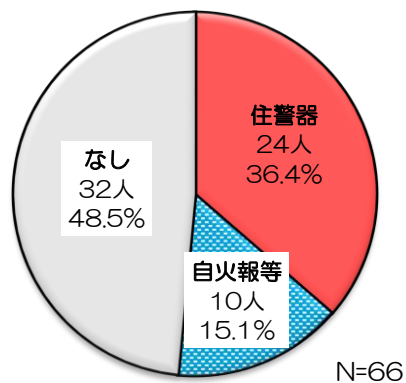
負傷者が発生した住宅火災の出火原因

負傷者が発生した住宅火災の出火原因は、「こんろ」によるものが最も多い。



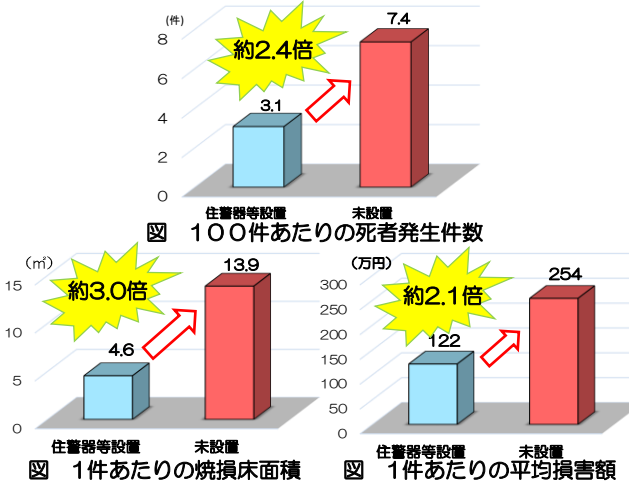
住警器等設置状況別の死者発生数

住警器等設置状況別の住宅火災による死者発生数を見ると、設置なしが約半数を占めている。



住宅用火災警報器等設置状況別の比較

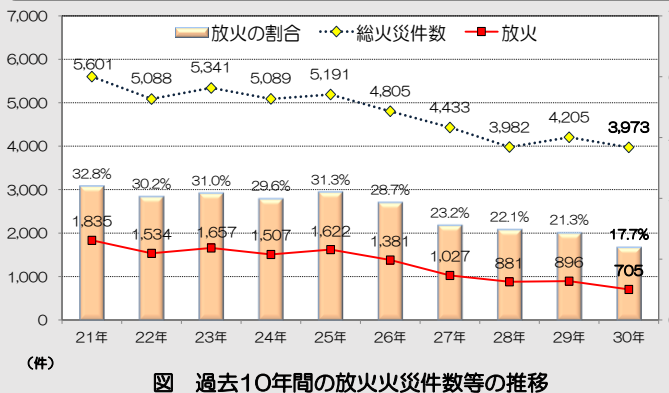
住警器等設置状況別に、火災100件あたりの死者数、火災1件あたりの焼損床面積及び損害額を比較すると、住警器等の「設置あり」の方が被害が少ない。



第2章 放火火災の実態

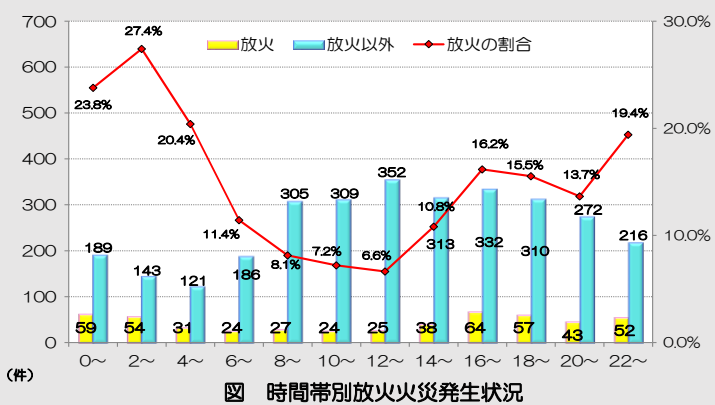
放火火災の発生件数

放火火災の件数は減少傾向であり、平成28年から1,000件を下回っている。総火災件数に占める放火火災の発生件数の割合は、過去10年で最も低い数値となっている。



放火火災の発生時間帯

時間帯別に見ると、0時～3時、16時～18時及び22時～23時台に多く発生し、火災に占める放火火災の割合は、2時～3時が高くなっている。



※住警器等は住警器及び自火報等設置ありの件数
死者発生件数は死者及び負傷者の両方は発生した件数を含む

目 次

第1章 住宅火災の実態

1	住宅火災の概要	- 1 -
(1)	住宅火災件数	- 1 -
(2)	住宅火災による死者数	- 2 -
(3)	住宅火災の焼損床面積	- 3 -
2	住宅火災の状況	- 4 -
(1)	出火原因別	- 4 -
(2)	着火物別	- 4 -
(3)	出火箇所別	- 5 -
(4)	初期消火別	- 5 -
3	住宅火災による死傷者の状況	- 7 -
(1)	出火原因別	- 7 -
(2)	着火物別	- 11 -
(3)	出火箇所別	- 14 -
(4)	月・時間帯別	- 15 -
(5)	年齢別	- 16 -
(6)	世帯別	- 17 -
(7)	死傷者発生時の状態別	- 17 -
4	住宅用火災警報器の状況	- 19 -
(1)	住宅火災の内訳	- 19 -
(2)	住警器設置有無別の比較	- 20 -
(3)	全部設置と一部設置の比較	- 20 -
(4)	奏功事例の内訳	- 22 -

第2章 放火火災の実態

1	放火火災の概要	- 24 -
2	放火火災の状況	- 24 -
(1)	月別発生状況	- 24 -
(2)	曜日別発生状況	- 25 -
(3)	時間帯別発生状況	- 25 -
(4)	連続放火火災の発生状況	- 26 -
(5)	主な火元建物用途	- 27 -
(6)	主な放火場所と着火物	- 27 -

事例編

1 主な住宅火災の事例.....	- 29 -
(1) たばこ.....	- 29 -
(2) こんろ.....	- 29 -
(3) ストープ.....	- 30 -
(4) 着衣着火.....	- 30 -
(5) その他の出火原因.....	- 32 -
2 住宅用防災機器等の主な奏功事例.....	- 33 -
(1) こんろ.....	- 33 -
(2) たばこ.....	- 35 -
(3) ストープ.....	- 35 -
(4) 放火.....	- 36 -
(5) その他.....	- 36 -

資料編

1 区市町村別住宅火災状況.....	- 38 -
2 区市町村別住宅火災による死者状況.....	- 39 -
3 区市町村別放火火災状況.....	- 40 -

第1章 住宅火災の実態

(※火災による死者及び住宅火災による死者・負傷者は全て自損を除く)

1 住宅火災の概要

(1) 住宅火災件数

平成30年中の総火災件数は3,973件発生し、このうち住宅火災（住宅《複合用途建物の住宅部分を含む》、共同住宅《寄宿舍を含む》から出火した火災をいう。）は1,484件で、前年に比べ113件減少しています（図1-1）。

また、建物から出火した火災の件数は、2,609件発生し、そのうち住宅火災の割合は56.9%です。住宅火災の内訳は、住宅539件（36.3%）、共同住宅945件（63.7%）となっています（図1-1、表1-1、表1-2、図1-2）。

* 治外法権及び管外からの延焼火災は、総火災件数のみ計上します。

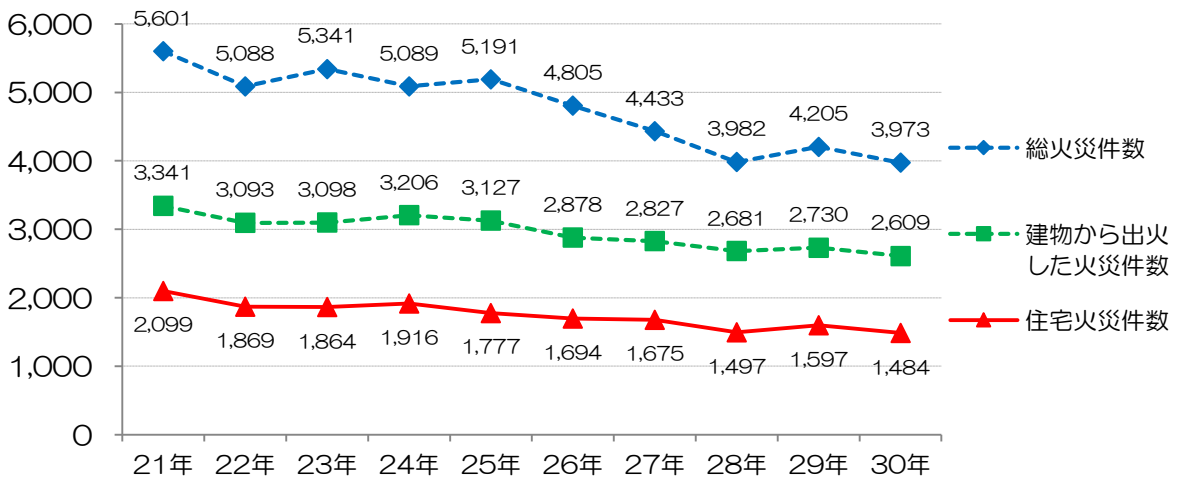


図1-1 最近10年間の住宅火災件数等の推移

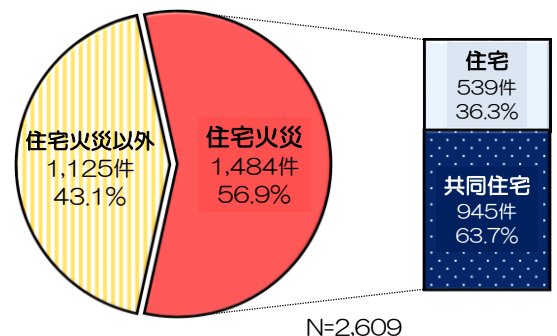
表1-1 最近10年間の住宅火災件数等

	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	29年	30年
総火災件数	5,601	5,088	5,341	5,089	5,191	4,805	4,433	3,982	4,205	3,973
建物から出火した火災件数	3,341	3,093	3,098	3,206	3,127	2,878	2,827	2,681	2,730	2,609
住宅火災件数	2,099	1,869	1,864	1,916	1,777	1,694	1,675	1,497	1,597	1,484
建物から出火した火災に対する住宅火災の割合	62.8%	60.4%	60.2%	59.8%	56.8%	58.9%	59.3%	55.8%	58.5%	56.9%

表1-2 建物火災の内訳

* 「建物から出火した火災」とは火元の用途が建物の火災です。

建物から出火した火災	2,609件	
	内訳件数	
住宅火災件数	1,484件 (56.9%)	
	住宅	539件 (36.3%)
	共同住宅	945件 (63.7%)
住宅火災以外の建物から出火した火災	1,125件 (43.1%)	



(2) 住宅火災による死者数

平成 30 年中の火災による死者は 74 人で、前年に比べ 9 人増加しています。そのうち自損を除く住宅火災による死者は 66 人で、前年に比べ 7 人増加しています。火災による死者のうち住宅火災による死者の占める割合は、89.2%となっています（表 1-3、図 1-3）。

住宅火災による死者のうち、65 歳以上の高齢者（以下「高齢者」という。）は、49 人と全体の 74.2%を占め、住宅火災による死者に占める高齢者の割合は、非常に高い割合となっています（図 1-3、図 1-4、表 1-3）。

また、住宅火災の死者を用途別でみると、住宅で 27 人(40.9%)、共同住宅で 39 人(59.1%)の死者が発生しており、共同住宅の割合が高くなっています（表 1-4、図 1-5）。

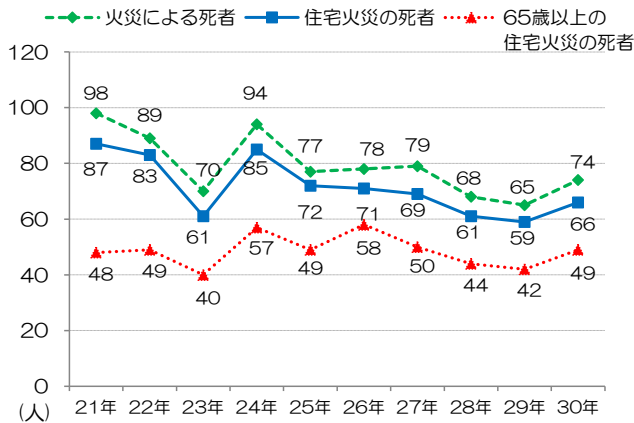


図 1-3 過去 10 年間の住宅火災等による死者数の推移

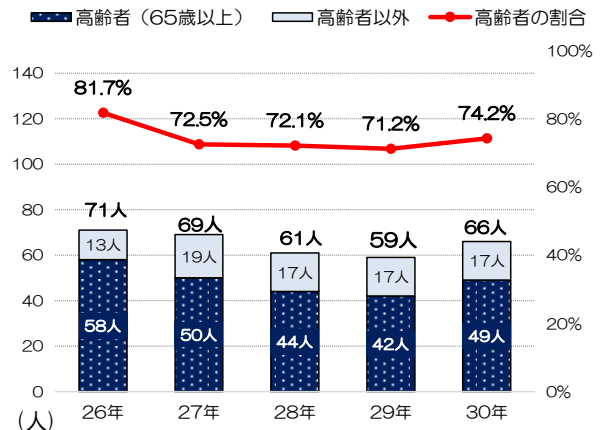


図 1-4 過去 5 年間の住宅火災による

死者数と高齢者の割合

表 1-3 過去 10 年間の住宅火災による死者数

	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	29年	30年
火災による死者	98	89	70	94	77	78	79	68	65	74
住宅火災の死者	87	83	61	85	72	71	69	61	59	66
住宅火災の死者の火災による死者に対する割合	88.8%	93.3%	87.1%	90.4%	93.5%	91.0%	87.3%	89.7%	90.8%	89.2%
高齢者の住宅火災による死者	48	49	40	57	49	58	50	44	42	49
高齢者の住宅火災の死者割合	55.2%	59.0%	65.6%	67.1%	68.1%	81.7%	72.5%	72.1%	71.2%	74.2%

表 1-4 住宅火災による死者の内訳（カッコ内は高齢者数）

用途別	死者数	割合
住宅	27 (24)	40.9%
共同住宅	39 (25)	59.1%
合計	66 (49)	100%

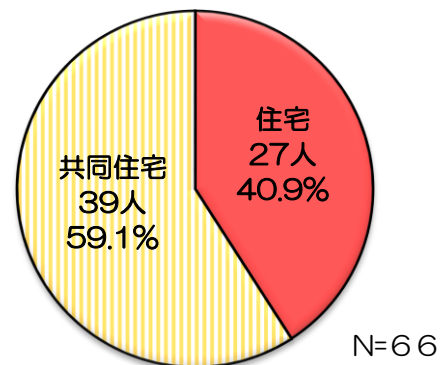


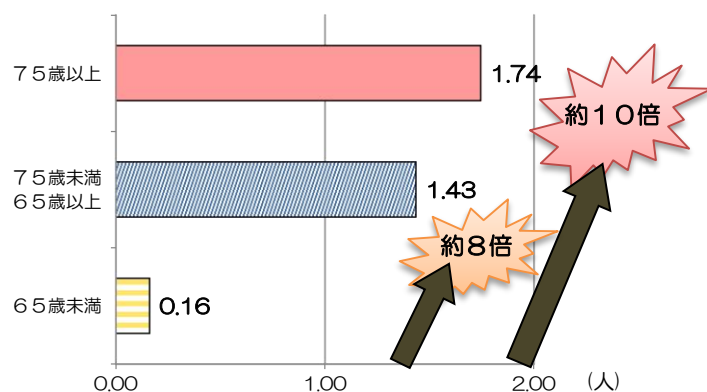
図 1-5 住宅用途別死者の内訳（自損を除く）

高齢者と高齢者以外の人口 10 万人あたりの住宅火災による死者発生数を比較すると、65 歳未満の死者は 0.16 人発生しているのに対し、65 歳以上 75 歳未満の死者は 1.43 人と約 8 倍に増加し、さらに 75 歳以上の死者は 1.74 人と約 10 倍に増加しています（表 1-5、図 1-6）。

今後、ますます高齢者人口の増加が見込まれることから、より積極的な高齢者の被害低減対策を行う必要があります。

表 1-5 高齢者死者数と人口

年 齢 別	死者	管 内 人 口	人口 10 万人あたりの死者発生数
75 歳以上	27	1,547,515	1.74
75 歳未満 65 歳以上	22	1,533,509	1.43
65 歳未満	17	10,556,420	0.16



※人口：平成 30 年 1 月 1 日現在

（「住民基本台帳による東京都の世帯と人口」東京都より）

図 1-6 年齢別人口 10 万人あたりの住宅火災による死者発生数

(3) 住宅火災の焼損床面積

平成 30 年中の住宅火災の焼損床面積は 10,562 m²で、前年に比べ 3,014 m²減少しています。

また、住宅火災 1 件あたりの平均焼損床面積は 7.11 m²で、前年に比べ 1.39 m²減少しています（図 1-7）。

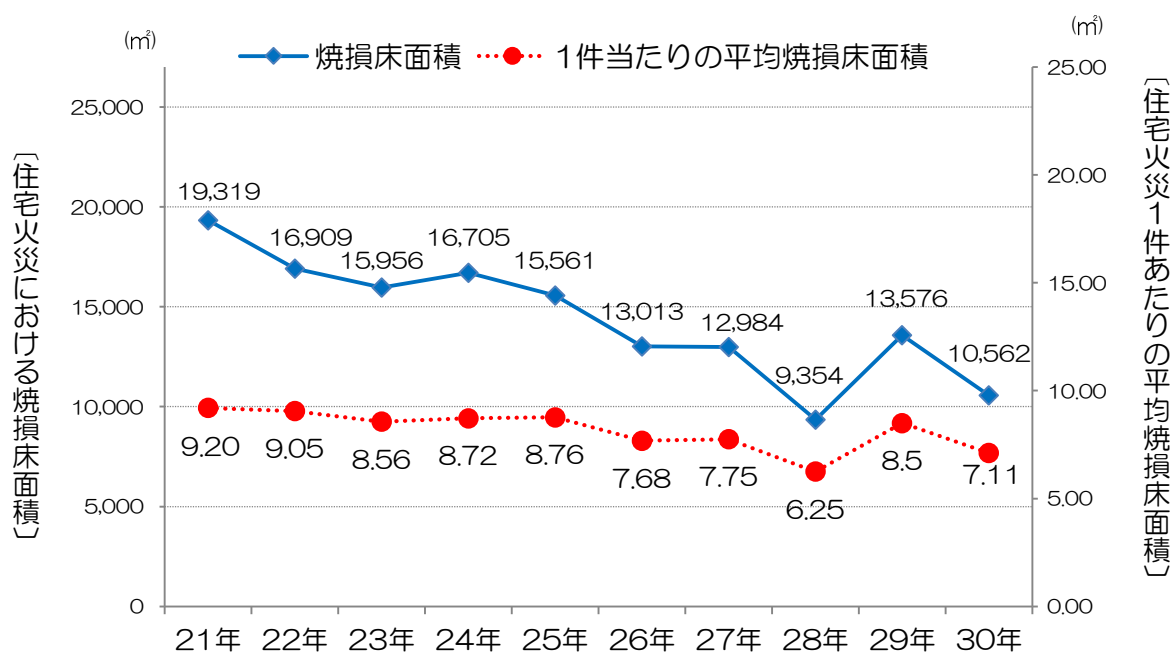


図 1-7 過去 10 年間の住宅火災の焼損床面積の推移

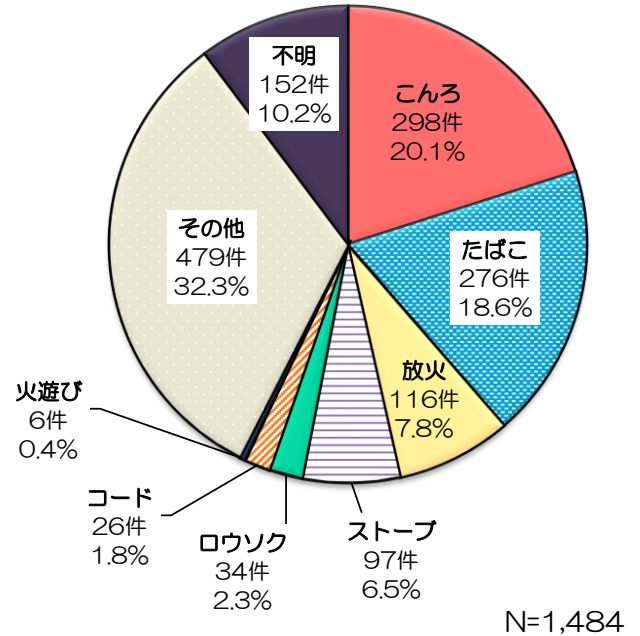
2 住宅火災の状況

(1) 出火原因別

出火原因別にみると、「こんろ」が298件（20.1%）と最も多く、次いで「たばこ」が276件（18.6%）、「放火」が116件（7.8%）、「ストーブ」が97件（6.5%）となっています（表1-6、図1-8）。

表 1-6 出火原因別住宅火災件数

出火原因	住宅火災		
	合計	住宅	共同住宅
こ ん ろ	298	89	209
た ば こ	276	74	202
放 火	116	30	86
ス ト ー ブ	97	44	53
ロ ウ ソ ク	34	16	18
コ ー ド	26	12	14
火 遊 び	6	2	4
そ の 他	479	200	279
不 明	152	72	80
合 計	1,484	539	945



※1 「こんろ」は、ガステーブル等、電気こんろを合わせたものです。
 ※2 「放火」は、放火の疑いを含みます。
 ※3 「ストーブ」は、電気、ガス、石油を合わせたものです。

図 1-8 住宅火災の出火原因別の割合

(2) 着火物別

着火物別にみると、「くず類」が205件（13.8%）と最も多く、次いで「布団類」が174件（11.7%）、「紙類」が123件（8.3%）となっています（表1-7、図1-9）。

表 1-7 着火物別住宅火災件数

着火物	住宅火災		
	合計	住宅	共同住宅
く ず 類	205	60	145
布 団 類	174	68	106
紙 類	123	36	87
衣 類 ・ 織 維 類	110	34	76
動 植 物 油	80	22	58
内装・建具・家具類	73	36	37
ガ ス 類	55	20	35
着 衣	41	14	27
電 線 被 覆	27	18	9
ガ ソ リ ン 等	16	4	12
カーテン・じゅうたん等	16	7	9
そ の 他	430	161	269
不 明	134	59	75
総 計	1,484	539	945

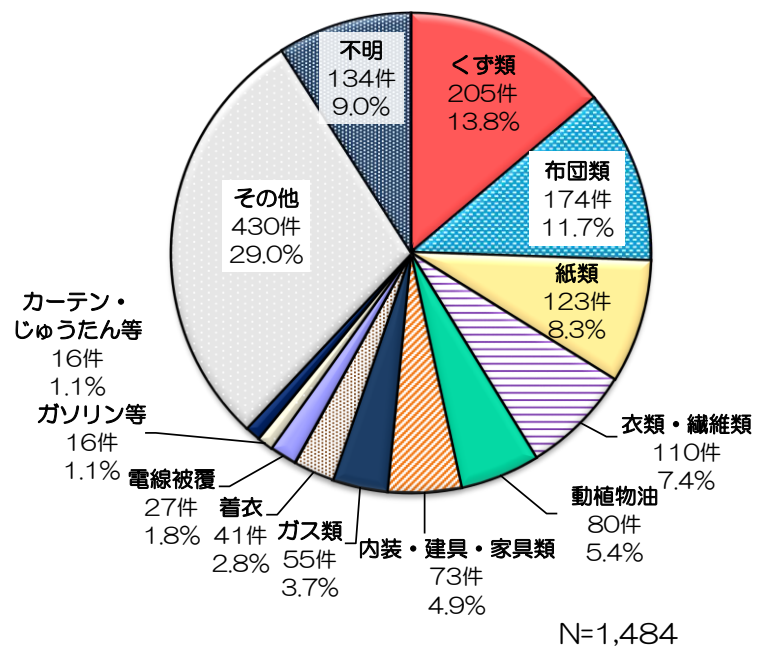


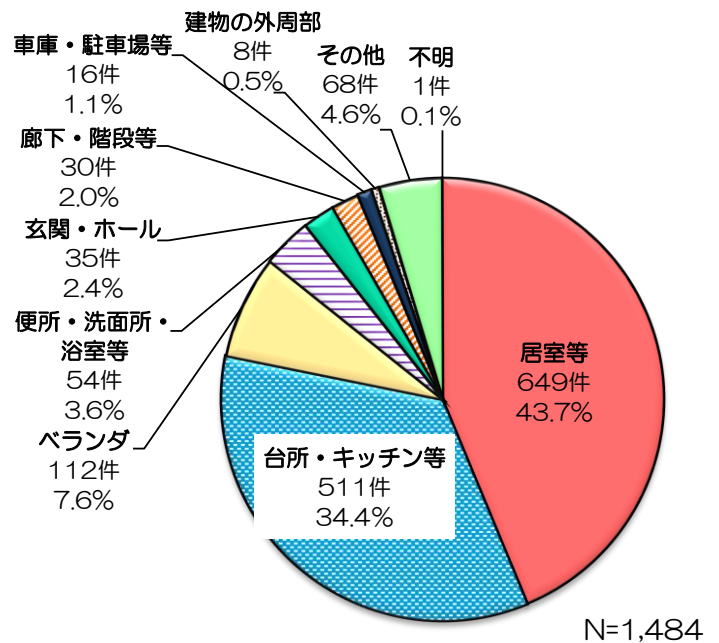
図 1-9 住宅火災の着火物別

(3) 出火箇所別

出火箇所別にみると、「居室等」が 649 件（43.7%）と最も多く、次いで「台所・キッチン等」が 511 件（34.4%）となっており、これらを合わせると全体の約 8 割（78.1%）を占めています（表 1-8、図 1-10）。

表 1-8 出火箇所別住宅火災件数

出火箇所	住宅火災		
	合計	住宅	共同住宅
居室等	649	275	374
台所・キッチン等	511	164	347
ベランダ	112	25	87
便所・洗面所・浴室等	54	16	38
玄関・ホール	35	6	29
廊下・階段等	30	3	27
車庫・駐車場等	16	4	12
建物の外周部	8	7	1
その他	68	38	30
不明	1	1	0
総計	1,484	539	945



(4) 初期消火別

平成 30 年中の住宅火災における初期消火実施状況をみると、住宅火災 1,484 件のうち、「初期消火実施」が 960 件（64.7%）、「初期消火無し」が 524 件（35.3%）となっています。また、「初期消火実施」のうち成功・失敗別にみると、「初期消火成功」が 761 件（79.3%）、「初期消火失敗」199 件（20.7%）となっています（図 1-11）。

「初期消火失敗」の理由には、「発見が遅れた」、「あせり消火できなかった」、「煙が充満していた」等がありました。

平成 30 年中の住宅火災における初期消火の実施状況を、火災 1 件当たりの死者発生数、損害額、焼損面積を比較すると、全ての項目で初期消火実施の方が被害は少なくなっています（図 1-12-1～3）。

また、平成 30 年中の住宅火災における初期消火が成功した火災と、初期消火が失敗及び無しの火災について、火災 1 件当たりの死者発生数、損害額、焼損面積を比較すると、全ての項目で初期消火実施の方が被害は少なくなっています（図 1-12-4～6）。

同様に、過去 5 年間の初期消火の実施状況、初期消火の成功と初期消火が失敗及び無しの火災について比較すると、全ての項目で初期消火実施及び初期消火成功の方が被害は少なくなっています（図 1-12-7～12）。

このことから、初期消火の実施は火災の被害低減につながるとともに、初期消火を成功させることにより顕著に被害が減少していることが分かります。

家庭への消火器等の備えや、火災の早期発見につながる住宅用火災警報器を設置することの大切さを継続して呼びかける必要があります。また、消火器が正しく使用できるように、防火防災訓練等で初期消火訓練を実施していくことも重要です。

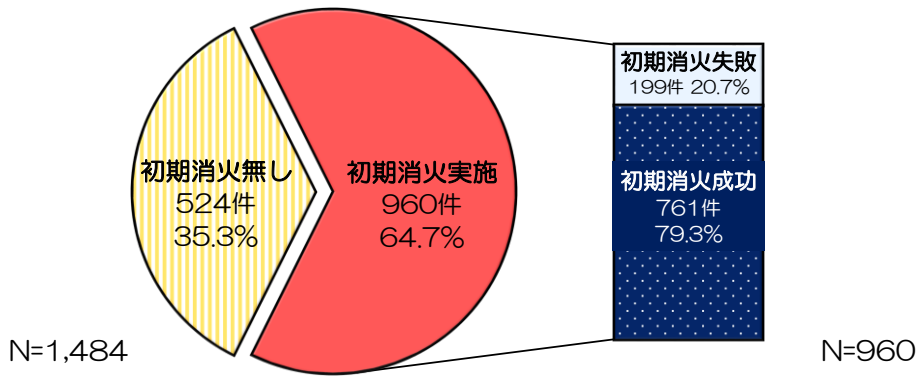


図 1-11 初期消火実施状況

平成 30 年中

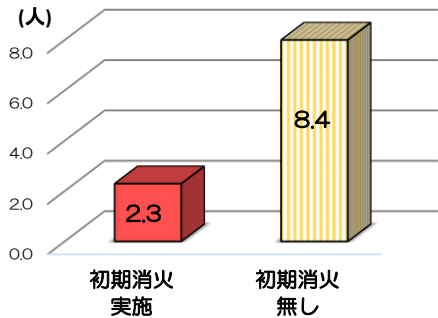


図 1-12-1 火災 100 件当たり死者発生数

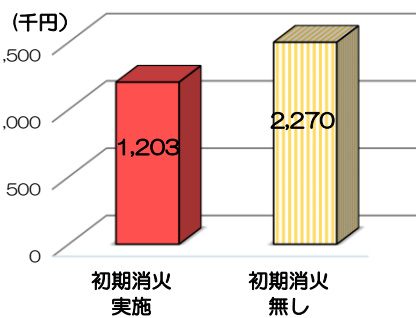


図 1-12-2 火災 1 件あたり損害額

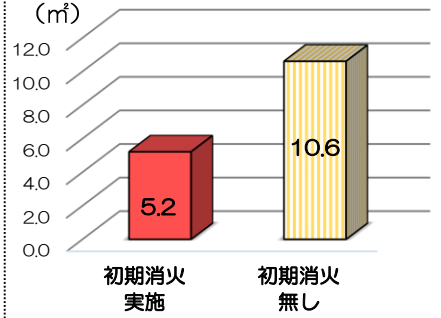


図 1-12-3 火災 1 件あたり焼損床面積

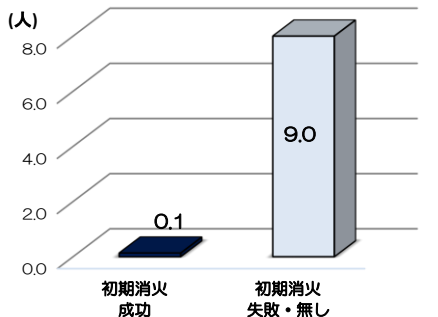


図 1-12-4 火災 100 件当たり死者発生数

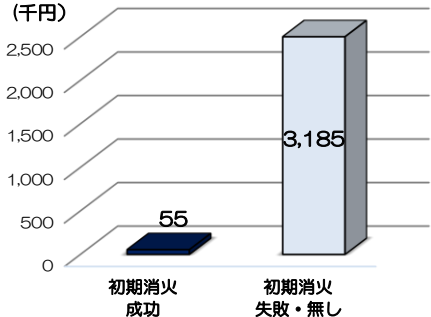


図 1-12-5 火災 1 件あたり 損害額

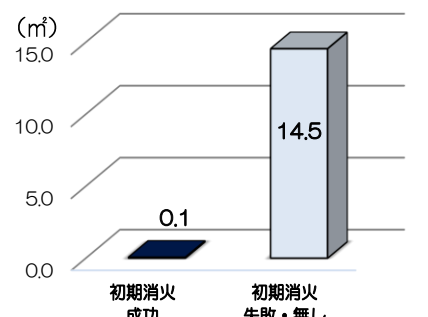


図 1-12-6 火災 1 件あたり焼損床面積

過去 5 年間の集計値 (平成 25 年から平成 30 年まで)

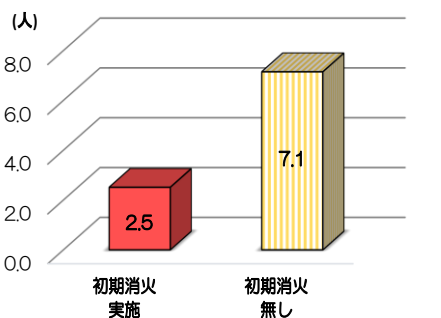


図 1-12-7 火災 100 件当たり死者発生数

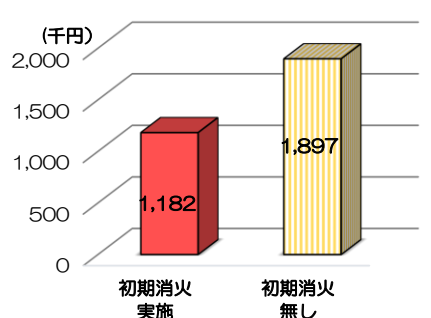


図 1-12-8 火災 1 件あたり 損害額

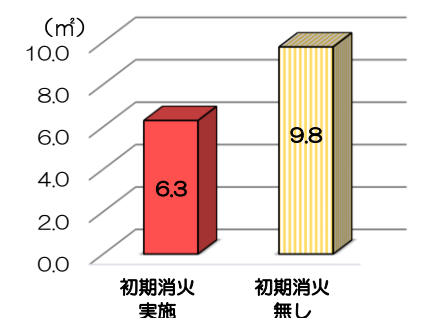


図 1-12-9 火災 1 件あたり焼損床面積

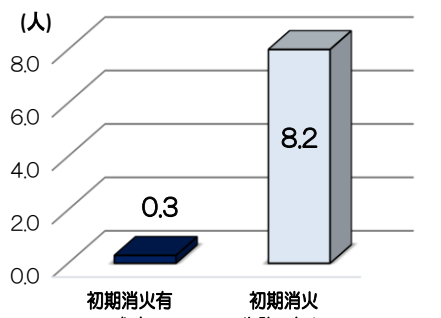


図 1-12-10 火災 1 件当たり死者発生数

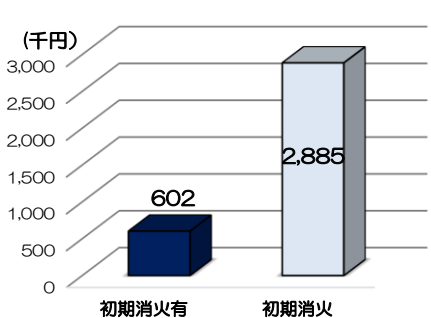


図 1-12-11 火災 1 件あたり 損害額

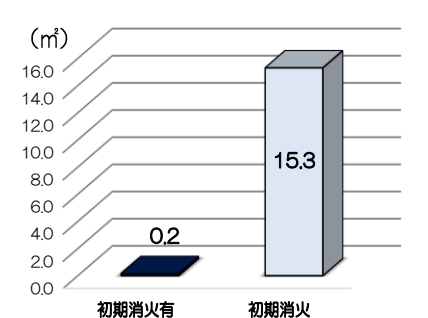


図 1-12-12 火災 1 件あたり焼損床面積

3 住宅火災による死傷者の状況

(1) 出火原因別

ア 死者が発生した住宅火災の出火原因

住宅火災による死者 66 人を出火原因別にみると、「たばこ」が 26 人（39.4%）と最も多く、次いで「ストーブ」が 9 人（13.6%）、「ロウソク」が 4 人（6.1%）、「こんろ」が 3 人（4.5%）となっています（表 1-9、図 1-13）。

表 1-9 出火原因別死者数

出火原因	死者数 (高齢者数)	死者発生 火災件数	出火原因別 死者発生率	(死者発生火災件数 /出火原因別 住宅火災件数)
たばこ	26(16)	25	9.1%	25/276
ストーブ	9(9)	9	9.3%	9/97
ロウソク	4(4)	3	8.8%	3/34
こんろ	3(2)	3	1.0%	3/298
放火	2(2)	2	1.7%	2/116
コード	1(1)	1	3.8%	1/26
その他	3(1)	2	0.4%	2/485
不明	18(14)	18	11.8%	18/152
合計	66(49)	63	4.2%	63/1,484

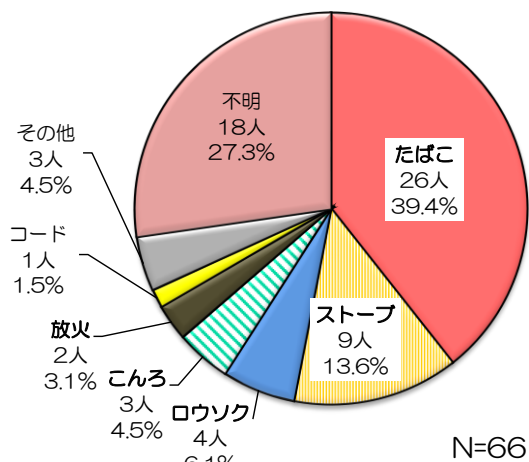


図 1-13 出火原因別死者の割合

- ※1 () は、高齢者の内数です。
- 2 「こんろ」は、ガステーブル等、電気こんろを合わせたものです。
- 3 「放火」は、放火の疑いを含まず。
- 4 「ストーブ」は、電気、ガス、石油を合わせたものです。

死者が発生した住宅火災の出火原因のうち、たばこ、ストーブ、こんろは毎年、上位3位を占めていましたが、平成30年中は、たばこ、ストーブ、ロウソクとなっています。その発生の経過を各出火原因別にみると、それぞれ特徴があります。

最も多くの死者が発生している出火原因である「たばこ」をみると、死者 26 人のうち「火源が落下」が 19 人、「不始末」が 6 人、「寝たばこ」が 1 人となっています。「火源が落下」、「寝たばこ」は、たばこの火源が布団や着衣等の可燃物に着火し、火災となっています。「不始末」は、消えていない吸殻をごみ箱や吸殻をためた状態の灰皿に捨てることで可燃物に着火し、火災となっています。これらは適切な方法で喫煙、廃棄していれば発生を防止できたと思われるものです。また、性別でみると男性が 20 人と、多くの割合を占めています（表 1-10-1、図 1-14-1）。

2 番目に多い「ストーブ」による火災をみると、死者 9 人のうち「可燃物が接触」が 8 人、「可燃物が落下」が 1 人となっており、その全てが高齢者です。「可燃物が接触」することで亡くなった方が約9割を占めており、最も多く、これはストーブの周囲にある布団や衣類に着火したことで火災となっています。

また、ストーブの死者の中で6人が「電気ストーブ」によるものであることから、特に、注意喚起が必要です。（表 1-10-2、図 1-14-2）。

3 番目に多い「ロウソク」による火災をみると、死者 4 人のうち「火源が転倒」が 2 人、「可燃物が接触」が 1 人、「不明」が 1 人となっており、その全てが高齢者です。（表 1-10-3、図

1-14-3)。

4番目に多い「こんろ」による火災を見ると、死者3人のうち「可燃物が接触」が2人、「接
 炎する」が1人となっています。(表 1-10-4、図 1-14-4)

表 1-10-1 たばこによる死者の内訳

たばこの内訳	死者数 (高齢者数)	男性	女性
火源が落下	19 (11)	15	4
不始末	6 (4)	4	2
寝たばこ	1 (1)	1	0
合計	26 (16)	20	6

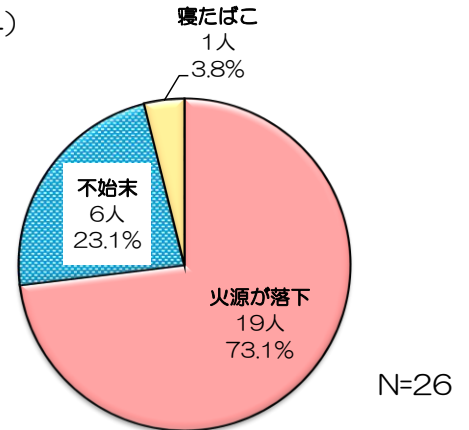


図 1-14-1 たばこによる住宅火災死者の経過

表 1-10-2 ストープによる死者の内訳

ストーブの内訳	死者数 (高齢者数)	男性	女性
可燃物が接触	8 (8)	2	6
可燃物が落下	1 (1)	1	0
合計	9 (9)	3	6

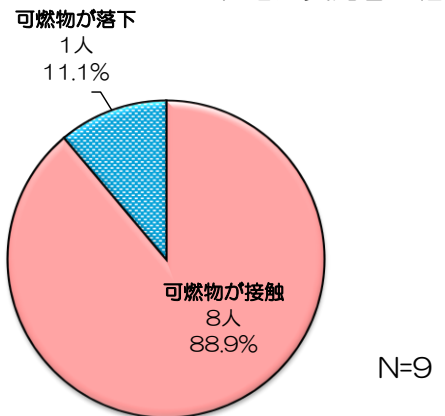


図 1-14-2 ストープによる住宅火災死者の経過

表 1-10-3 ロウソクによる死者の内訳

ロウソクの内訳	死者数 (高齢者数)	男性	女性
火源が転倒	2 (2)	1	1
可燃物が接触	1 (1)	0	1
不明	1 (1)	0	1
合計	4 (4)	1	3

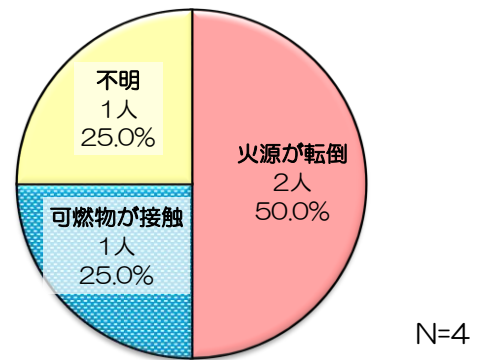


図 1-14-3 ロウソクによる住宅火災死者の経過

表 1-10-4 こんろによる死者の内訳

こんろの内訳	死者数 (高齢者数)	男性	女性
可燃物が接触	2 (1)	2	0
接炎する	1 (1)	0	1
合計	3 (2)	2	1

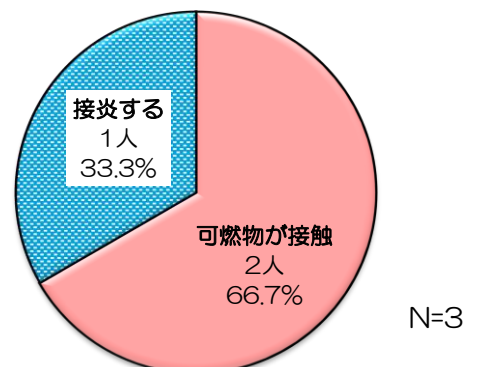


図 1-14-4 こんろによる住宅火災死者の経過

電気火災のうち漏電・電線の短絡・スパーク・半断線・トラッキング等による発熱によって起こる火災（以下「電気コード火災等」という。）は、火の無い場所から出火し、大変危険です。平成30年の火災件数は、昨年よりも15件増加しています。死者については、2人発生しており、昨年から1人減少しています（図1-15）。

死者が発生した「電気コード火災等」の主な出火原因についてまとめると、「コード」、「差し込みプラグ」で多く発生しています（図1-16）。

経過別にみると、「電線が短絡する」、「金属の接触部分が過熱する」、「トラッキング」の順で多く発生しています（図1-17）。

コードは、物に踏まれたり折れ曲がった状態で使用されていたためにコードの被覆が損傷したり、長年使用したことによる経年劣化により、短絡や半断線が発生して火災に至るケースがあります。差し込みプラグは、差し刃間のトラッキング現象による火災が多く発生しています。

トラッキング現象を防止するためには、差し込みプラグは常時差し込んだままにせず、使用時以外は抜いておくことや、長期間差したままのプラグは定期的に点検するとともに、乾いた布などで掃除し、発熱等の異常がある場合は交換することが大切です。

特に埃や湿気の多い環境下で使われているものや、家具等の陰に隠れているものには細心の注意が必要です。

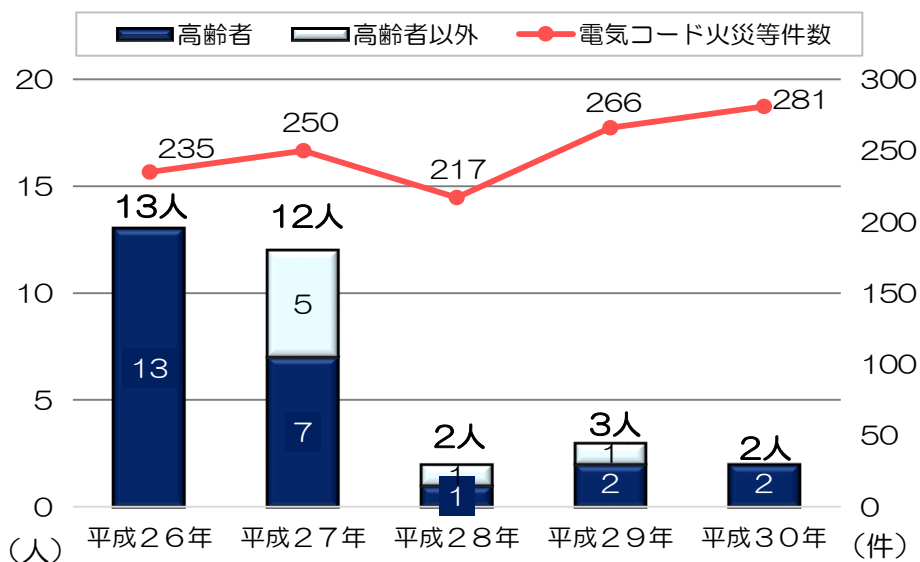


図1-15 過去5年間の住宅火災における「電気コード火災等」の死者数・件数

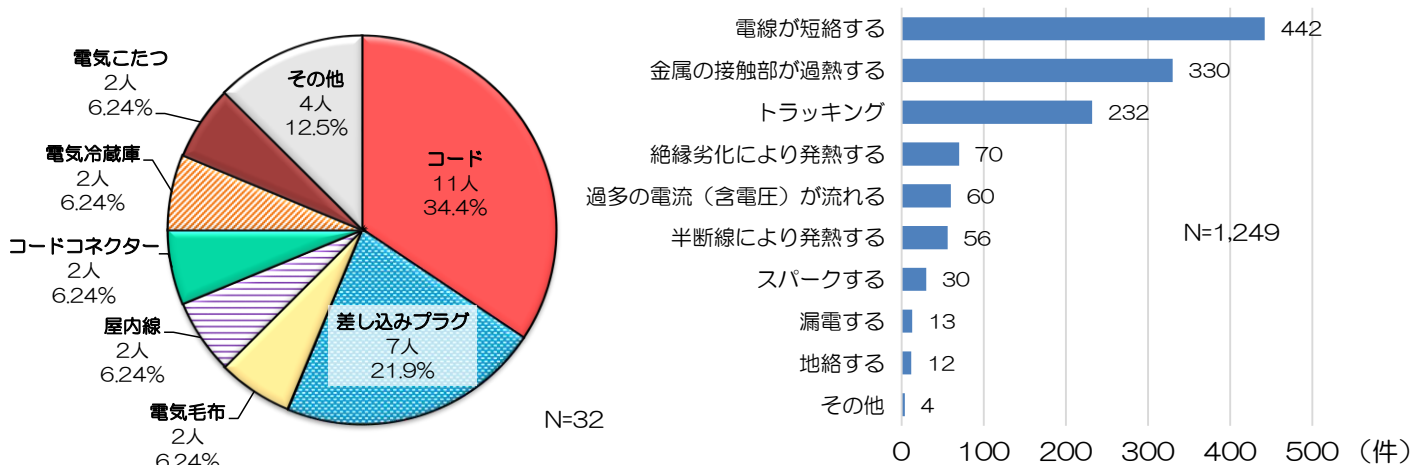


図1-16 主な「電気コード火災等」による死者数 図1-17 「電気コード火災等」における主な原因 (H26年～30年)

イ 負傷者の発生した火災の出火原因

住宅火災による負傷者は502人で、出火原因別でみると、「こんろ」が110人(21.9%)と最も多く、次いで「たばこ」が87人(17.3%)、「ストーブ」が54人(10.8%)となっています(表1-12、図1-18)。

また、負傷者に占める高齢者の割合は、37.1%(186/502)であり、出火原因別でみると、「こんろ」が32.7%(36/110)、「たばこ」が34.5%(30/87)、「ストーブ」が46.3%(25/54)となっています(表1-12)。

表1-12 負傷者発生状況と出火原因

出火原因	負傷者数 (高齢者数)	負傷者に占める 高齢者の割合
こ ん ろ	110 (36)	32.7% (36/110)
た ば こ	87 (30)	34.5% (30/87)
ス ト ー ブ	54 (25)	46.3% (25/54)
放 火	26 (5)	19.2% (5/26)
ロ ウ ソ ク	14 (8)	57.1% (8/14)
コ ー ド	4 (2)	50.0% (2/4)
火 遊 び	2 (0)	0.0% (0/2)
そ の 他	106 (37)	34.9% (37/106)
不 明	99 (43)	43.4% (43/99)
合 計	502 (186)	37.1% (186/502)

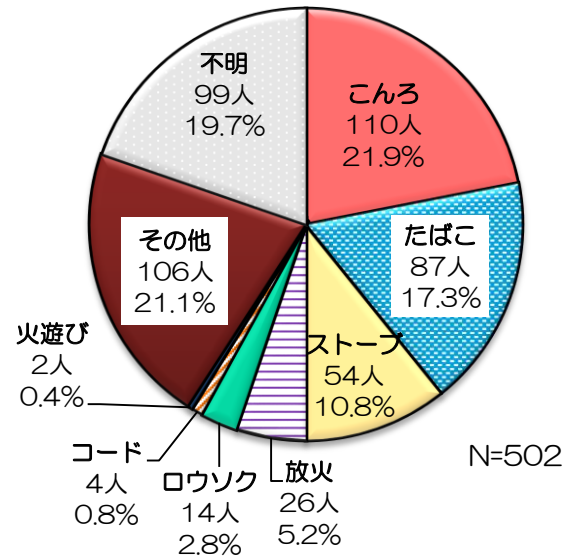


図1-18 出火原因別負傷者の割合

- ※1 ()は、高齢者の内数です。
 ※2 「こんろ」は、ガステーブル等、電気こんろを合わせたものです。
 ※3 「放火」は、放火の疑いを含みます。
 ※4 「ストーブ」は、電気、ガス、石油を合わせたものです。

負傷者が最も多く発生している「こんろ」での負傷者の内訳をみると、「天ぷら油火災」が26人と最も多くなっています。次いで「着衣に着火した火災」が25人、「エアゾール缶等に関連した火災」が10人と続きます(図1-19)。

調理中など特に油を加熱している際には、「その場を絶対に離れない」、「その場を離れるときは必ず火を消す」、「衣服の袖口や裾が火に触れないように気をつける」、「エアゾール缶等の火気厳禁の器物を調理器具周辺に置かない」、などの注意喚起が必要です。

また、燃えにくく燃え広がりにくい防災品のアームカバーやエプロンを使用することも有効な対策です。

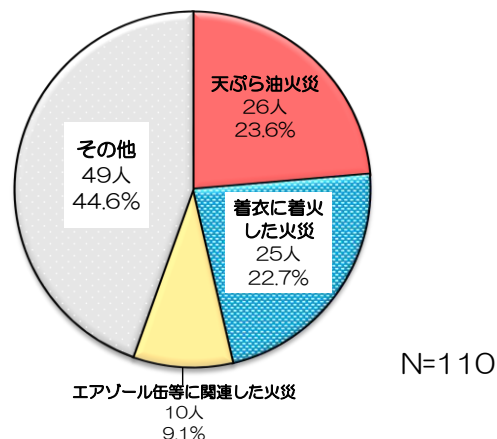


図1-19 「こんろ」による火災の負傷者内訳

(2) 着火物別

ア 死傷者が発生した住宅火災の着火物

着火物別の死者発生状況を見ると、「布団類」10人（15.2%）及び「内装・建具・家具類」10人（15.2%）が最も多く、次いで「くず類」9人（13.6%）となっています（表 1-13、図 1-20）。

表 1-13 着火物別死者数

着火物	死者数 (高齢者)	死者発生 火災件数	着火物別 死者発生率	(死者発生火災件数/ 着火物別住宅火災件数)
布 団 類	10 (9)	10	5.7%	10/174
内装・建具・家具類	10 (6)	7	9.6%	7/73
く ず 類	9 (6)	9	4.4%	9/205
衣 類 ・ 繊 維 等	6 (3)	6	5.5%	6/110
着 衣	4 (3)	4	9.8%	4/41
紙 類	1 (1)	1	0.8%	1/123
電 線 被 覆	-(-)	-	-	-/27
ガ ソ リ ン 等	-(-)	-	-	-/16
カーテン・じゅうたん等	1(-)	1	6.3%	1/16
動 植 物 油	-(-)	-	-	-/80
ガ ス 類	-(-)	-	-	-/55
そ の 他	1 (1)	1	0.2%	1/430
不 明	24 (20)	24	17.9%	24/134
合 計	66 (49)	63	4.2%	63/1,484

※ () は、高齢者の内数です。

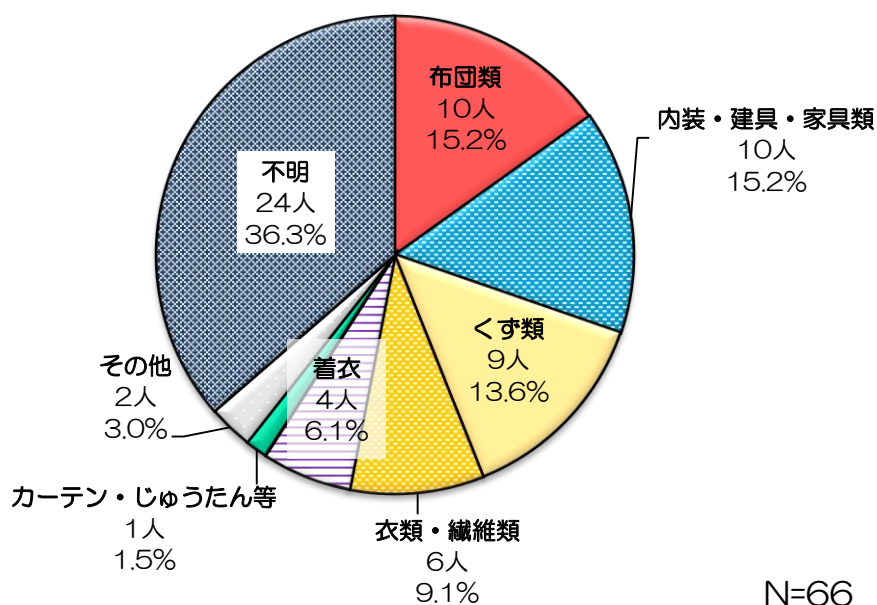
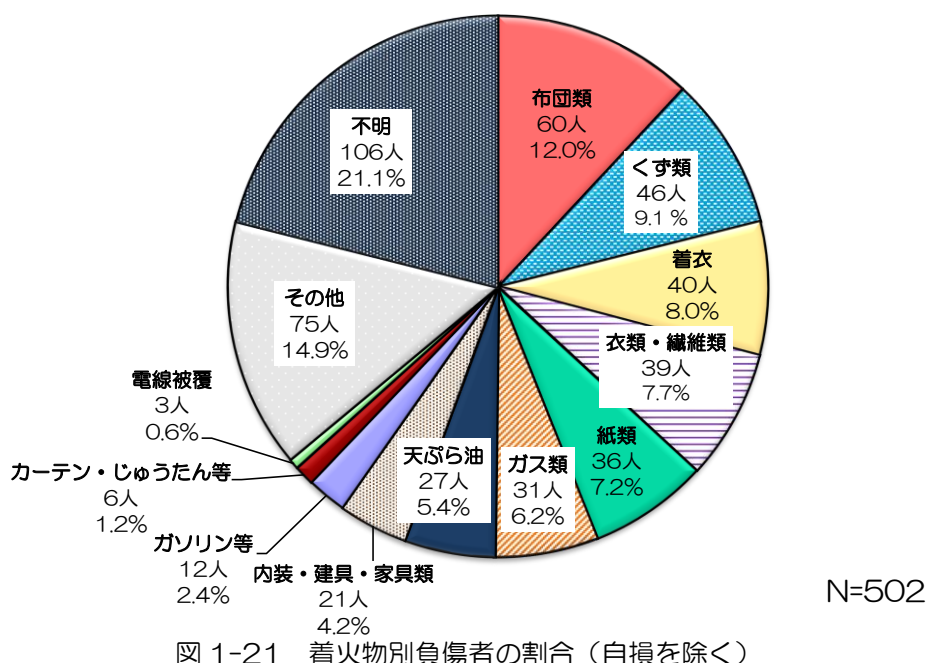


図 1-20 着火物別死者の割合 (自損を除く)

また、負傷者の発生状況をみると、「布団類」が最も多く、次いで「くず類」、「着衣」、「衣類・繊維類」と続いています（表 1-14、図 1-21）。

表 1-14 着火物別負傷者数

着火物	負傷者数 (高齢者)	負傷者発生 火災件数	着火物別 負傷者発生率	(負傷者発生火災件数 /着火物別住宅火災件数)
布 団 類	60(25)	45	25.9%	45/174
く ず 類	46(16)	31	15.1%	31/205
着 衣	40(16)	36	87.8%	36/41
衣 類 ・ 繊 維 類	39(15)	24	21.8%	24/110
紙 類	36(6)	26	21.1%	26/123
ガ ス 類	31(9)	26	47.3%	26/55
天 ぷ ら 油	27(6)	21	26.3%	21/80
内装・建具・家具類	21(7)	15	20.5%	15/73
ガ ソ リ ン 等	12(3)	10	62.5%	10/16
カーテン・じゅうたん等	6(3)	4	25.0%	4/16
電 線 被 覆	3(1)	3	11.1%	3/27
そ の 他	75(32)	64	14.9%	64/430
不 明	106(47)	61	45.5%	61/134
合 計	502(186)	366	24.7%	366/1,484



適正な喫煙管理や調理時における配慮が必要なのはもちろんですが、死者、負傷者が発生した火災の着火物の上位を占める「衣類・繊維類」、「布団類」等の繊維製品への着火防止対策として、防災品の使用が有効です。万が一、火源に接しても通常の製品と比べて燃え広がりにくく、火災の拡大を防止する効果が期待できることから、都民に対して継続的に普及促進を図っていく必要があります。

イ 着火物と出火原因

着火物で死者数と負傷者数が高い割合である「布団類」の出火原因は、「たばこ」が74件（42.5%）とほぼ半数を占めています。「たばこ」を出火原因として「布団類」に着火した火災では、74件中、34人の死傷者が発生し、その内、死者が7人、重篤の負傷者が3人となっています（図1-22）。

「たばこ」を出火原因として「布団類」に着火した火災による死傷者を、程度別の年齢構成をみると、死亡は高齢者、軽症は高齢者以外が多い割合を占めています（図1-23）。

このことから「布団類」と「たばこ」の組み合わせは、年齢に関係なく発生の危険度があるため注意が必要です。

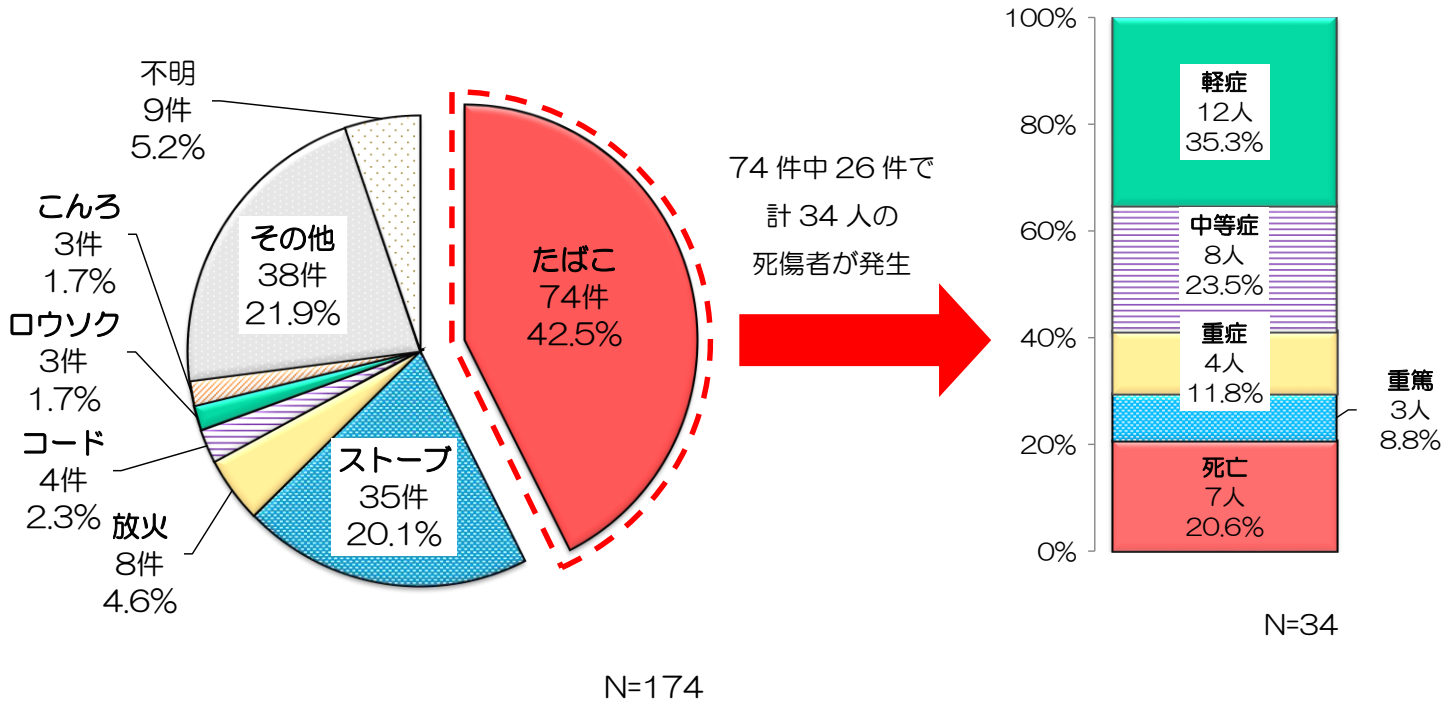


図1-22 「布団類」への着火による火災の出火原因件数と「たばこ」による死傷者数の内訳

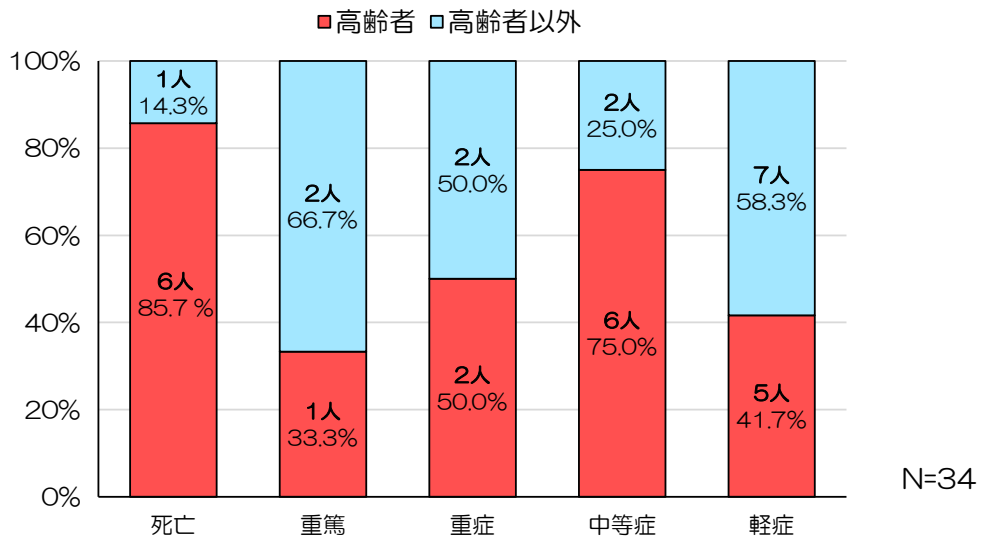


図1-23 「布団類」を着火物とした「たばこ」火災による年齢構成別の発生状況

(3) 出火箇所別

出火箇所別の死者発生状況を見ると、「居室等」が51人（77.3%）と最も多く、次いで「台所・キッチン等」が11人（16.7%）となっており、「居室等」「台所・キッチン等」を合わせると9割以上を占めています（表1-15、図1-23）。

表1-15 出火箇所別死者数

出火箇所	死者数	発生 件数	出火箇所別 死者発生率	(死者発生火災件数 /出火箇所別 住宅火災件数)
居室等	51(40)	49	7.6%	49/649
台所・キッチン等	11(7)	11	2.2%	11/511
玄関・ホール	1(1)	1	-	1/35
ベランダ	-(-)	-	-	-/112
便所・洗面所・浴室等	-(-)	-	-	-/54
廊下・階段等	-(-)	-	-	-/30
車庫・駐車場等	-(-)	-	-	-/16
建物の外周部	-(-)	-	-	-/8
その他	3(1)	2	2.9%	2/68
不明	-(-)	-	-	-/1
総計	66(49)	63	4.2%	63/1,484

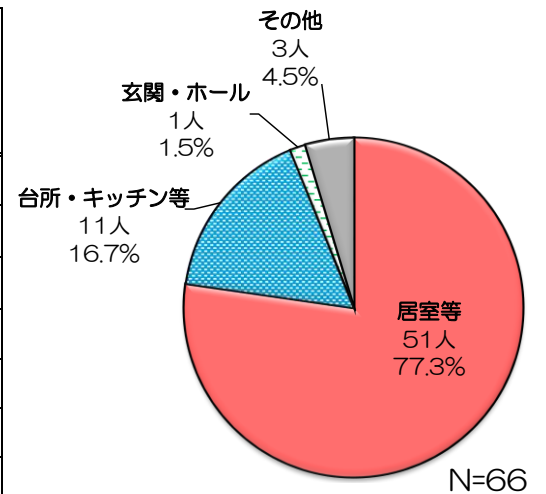


図1-23 出火箇所別死者の割合

また、負傷者の発生状況をも「居室等」が286人（56.9%）と最も高く、次いで「台所・キッチン等」が153人（30.5%）となっており、「居室等」「台所・キッチン等」を合わせると、約9割を占めています（表1-16、図1-24）。

表1-16 出火箇所別負傷者数 ※（ ）は、高齢者の内数です。

出火箇所	負傷者数	発生 件数	出火箇所別 負傷者 発生率	(負傷者発生 火災件数 / 出火箇所別 住宅火災件数)
居室等	286(118)	195	30.0%	194/649
台所・キッチン等	153(55)	124	24.3%	124/511
ベランダ	16(2)	11	9.8%	11/112
便所・洗面所・浴室等	12(3)	11	20.4%	11/54
玄関・ホール	6(1)	3	8.6%	3/35
廊下・階段等	5(1)	5	16.7%	5/30
車庫・駐車場等	3(1)	3	18.8%	3/16
その他	18(5)	13	17.1%	13/76
不明	3(0)	1	100.0%	1/1
合計	502(186)	366	24.7%	366/1484

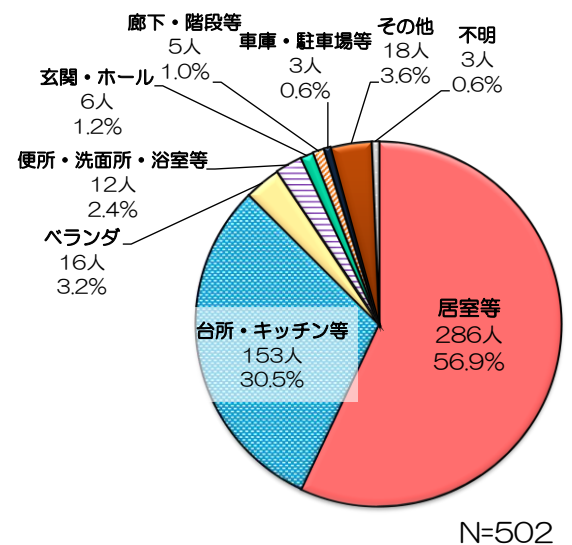


図1-24 出火箇所別負傷者の割合

このことから、住宅用火災警報器は、主な生活スペースである居室、火気を扱う台所、そして、下階の火災をいち早く知るために、階段にもそれぞれ設置する必要があります。

(4) 月・時間帯別

月別の住宅火災の件数をみると、1月から4月、12月で比較的多く発生しており、この5か月で、771件（52.0%）発生しています。

月別の死者の発生状況をみると、1月から3月、12月の4か月間に45人（68.2%）発生しています。この期間の月平均死者数約11.3人は、年間の月平均死者数5.5人より5.8人多くなっています。

月別の負傷者の発生状況を月別にみると、1月から3月、12月の4か月間に255人（50.8%）発生しています。この期間の月平均負傷者数63.8人は、年間の月平均負傷者数41.8人より22人多くなっています。

月別に件数、死者数、負傷者をみると、いずれも火災多発期（12月1日から3月31日まで）を含む期間中、あるいはその前後の時期に多く発生していることがわかります。

不明を除く死者の発生状況を時間帯別にみると、4時から5時、6時から7時の時間帯に15人（22.7%）発生しています。この時間帯の平均死者発生率7.5%は、年間の時間帯平均死者発生率4.2%より3.3%高くなっています（表1-18）。

表1-17 月別死傷者発生状況

出火月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
死者数	11	15	7	3	5	3	1	1	2	2	4	12	66
死者発生率※1	6.2%	8.3%	5.3%	2.5%	3.7%	3.3%	1.1%	1.0%	2.2%	1.7%	3.6%	6.4%	4.2%
高齢者死者数	9	11	6	3	4	3	1	0	2	1	2	7	49
負傷者数	72	65	61	37	33	23	30	23	34	35	32	57	502
負傷者発生率※2	28.1%	26.6%	32.3%	23.5%	18.5%	18.5%	24.7%	19.0%	22.8%	25.6%	24.3%	25.0%	24.7%
高齢者負傷者数	25	25	23	14	16	7	5	6	8	18	17	22	186
住宅火災件数	178	169	133	119	108	92	93	100	92	117	111	172	1484
死者発生住宅火災件数	11	14	7	3	4	3	1	1	2	2	4	11	63
負傷者発生住宅火災件数	50	45	43	28	20	17	23	19	21	30	27	43	366

表1-18 時間帯別死傷者発生状況

出火時間帯	0 ～ 1	2 ～ 3	4 ～ 5	6 ～ 7	8 ～ 9	10 ～ 11	12 ～ 13	14 ～ 15	16 ～ 17	18 ～ 19	20 ～ 21	22 ～ 23	不明	合計
死者数	5	6	7	8	6	4	4	2	6	4	6	6	2	66
死者発生率※1	4.9%	6.1%	10.6%	8.5%	5.3%	3.5%	2.9%	1.8%	3.6%	2.6%	3.2%	5.9%	1.7%	4.2%
高齢者死者数	5	5	1	7	6	4	3	2	3	4	3	4	2	49
負傷者数	53	64	35	47	28	34	40	25	47	47	47	31	4	502
負傷者発生率※2	32.4%	46.3%	34.8%	31.9%	21.1%	24.8%	24.3%	17.0%	26.3%	24.8%	22.9%	23.8%	3.4%	24.7%
高齢者負傷者数	12	17	10	17	13	13	19	11	28	15	15	13	3	186
住宅火災件数	102	82	66	94	114	113	136	112	137	153	157	101	117	1484
死者発生住宅火災件数	5	5	7	8	6	4	4	2	5	4	5	6	2	63
負傷者発生住宅火災件数	33	38	23	30	24	28	33	19	36	38	36	24	4	366

※1 死者発生率＝死者発生住宅火災件数／住宅火災件数

※2 負傷者発生率＝負傷者発生住宅火災件数／住宅火災件数

(5) 年齢別

年齢別に住宅火災による死者発生状況を見ると、65歳以上の高齢者が49人（74.2%）と全体の7割以上を占めています。65歳以上75歳未満の前期高齢者と75歳以上の後期高齢者に区分すると、前期高齢者が22人（33.3%）、後期高齢者が27人（40.9%）であり、後期高齢者の方が多く発生しています。

火災程度別で見ると、部分焼で亡くなっている火災が39人（59.1%）と最も多く、次いで全焼の13人（19.7%）となっています。比較的、延焼面積等の被害が少ない部分焼やぼやの火災においても死者が発生していることがわかります。

性別で見ると、男性が39人（59.1%）、女性が27人（40.9%）であり、男性の割合が高くなっています。このうち、高齢者については、男性が28人（71.8%）、女性が21人（77.8%）であり、女性の方が高齢者の割合が高くなっています（表1-19、図1-25）。

高齢者は、身体状況等により火災の発見や避難が遅れてしまい、被害が拡大する危険が高くなることから、死者発生割合の高さに表れていると考えられます。

表1-19 年齢別死者発生状況

年齢別	合計	火災程度				性別	
		全焼	半焼	部分焼	ぼや	男性	女性
乳幼児	0～5	0	0	0	0	0	0
未成年	6～9	0	0	0	0	0	0
	10～19	0	0	0	0	0	0
成人	20～29	0	0	0	0	0	0
	30～39	0	0	0	0	0	0
	40～49	3	0	3	0	2	1
	50～59	8	0	8	0	6	2
	60～64	6	2	0	3	3	3
前期高齢者	65～69	11	3	2	5	1	3
	70～74	11	2	2	6	1	5
後期高齢者	75～79	11	0	2	9	0	5
	80～89	12	3	2	5	2	5
	90～	4	3	1	0	0	3
合計	66	13	9	39	5	39	27

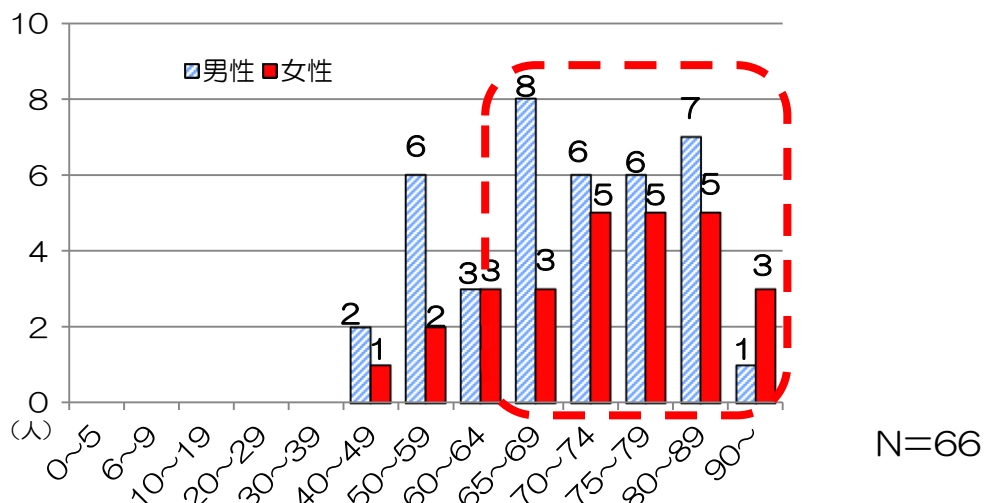
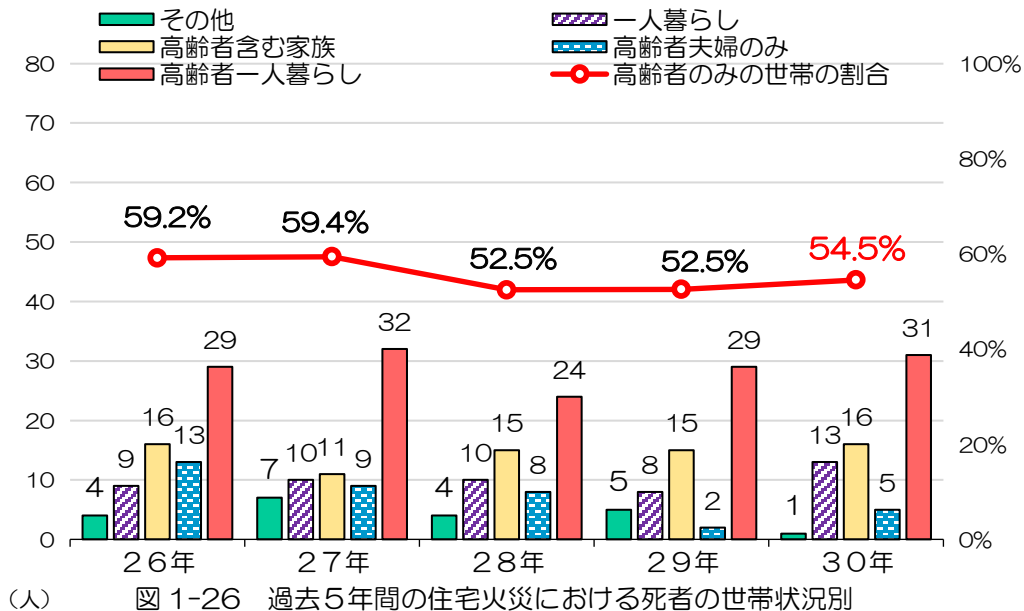


図1-25 住宅火災による死者年齢別・男女別推移（自損を除く）

(6) 世帯別

住宅火災による死者の家族構成をみると、一人暮らし、高齢者を含む家族、高齢者夫婦のみ、高齢者一人暮らしに分けられ、そのうち高齢者世帯のみの割合が全体の半数を占めています。高齢者のみの世帯において、火災が発生した際、身体状況等により火災の発見や避難が遅れてしまい、高齢者以外と比較して生命の危険が増すことが死者発生割合の高さに表れていると考えられます（図 1-26）。



(7) 死傷者発生時の状態別

住宅火災による死者の発生状況を状態別にみると、死者 66 人のうち、「就寝中」が 15 人（22.7%）であり、不明を除くと最も多く発生しています（表 1-20）。

また、負傷者発生時の状況をみると、負傷者数 502 人のうち、「初期消火中」が 131 人（26.1%）と最も多く、次いで「就寝中」87 人（17.1%）、「家事従事中」57 人（11.4%）と続いています（表 1-21）。

表 1-20 死者発生時の状態（自損を除く）

状 況	死者数（高齢者）	状 態 別 死 者 発 生 率	（ 状 態 別 死 者 数 / 住 宅 火 災 死 者 数 ）
就 寝 中	15(9)	22.7%	15/66
避 難 中	4(3)	6.1%	4/66
家 事 従 事 中	4(3)	6.1%	4/66
休 憩 ・ 休 憩 中	3(3)	4.5%	3/66
そ の 他	2(1)	3.0%	2/66
不 明	38(30)	57.6%	38/66
合 計	66(49)	100.0%	66/66

※（ ）は、高齢者の内数

表 1-21 負傷者発生時の状態

状 況	負傷者数(高齢者)	状 態 別 負 傷 者 発 生 率	(状態別負傷者数 /住宅火災負傷者数)
初 期 消 火 中	131(44)	26.1%	131/502
就 寝 中	87(31)	17.1%	87/502
家 事 従 業 中	57(22)	11.4%	57/502
避 難 中	54(18)	10.8%	54/502
休 憩 ・ 休 憩 中	30(13)	6.0%	30/502
作 業 中	27(5)	5.4%	27/502
飲 食 中	7(3)	1.4%	7/502
救 助 中	7(2)	1.4%	7/502
火 災 通 報 中	4(1)	0.8%	4/502
見 物 中	3(1)	0.6%	3/502
人命救助中(消防職・団員)	3(-)	0.6%	3/502
防ぎょ中(消防職・団員)	2(-)	0.4%	2/502
採 暖 中	2(2)	0.4%	2/502
消 防 隊 に 協 力 中	2(-)	0.4%	2/502
火 遊 び 中	1(-)	0.2%	1/502
そ の 他	40(16)	8.0%	40/502
不 明	45(28)	9.0%	45/502
総 計	502(186)	100.0%	502/502

※ () は、高齢者の内数

死者が最も多く発生した「就寝中」は、主に寝たばこによるものです。布団等に落ちたたばこは、しばらく無炎燃焼（炎を出さずに燃え広がること）を続け、気付いた時には室内に一酸化炭素等の有毒ガスが充満して、避難行動がとれずに命を落とす危険があります。

「火源の落下」、「寝たばこ」、「火種の残ったたばこを吸い殻でいっぱい灰皿等へ捨てることや、ごみ箱やごみ袋へ捨てる等の不始末」がほとんどを占めており、適切な方法で喫煙し、後始末をしていけば発生を防止できたと思われるものが大半であることから、正しい吸い殻の処理や喫煙者の防火意識の高揚が重要になります。

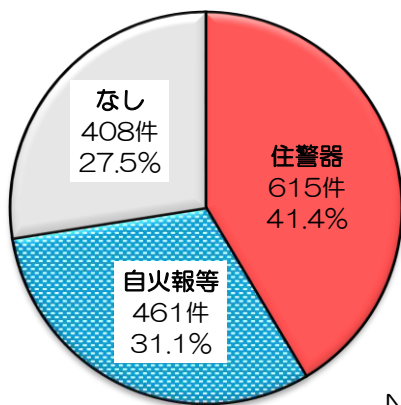
また、アームカバーやエプロン、寝具類などの防災製品を使用することで被害の低減につながることから、引き続き防災製品の周知をしていく必要があります。

負傷者が最も多く発生した「初期消火中」は、初期消火の際に火に接近しすぎたために火にあおられたり、煙を吸うなどにより負傷したものです。初期消火中の負傷を防ぐために、防災訓練や、消防署のイベントなどで初期消火訓練を行い、消火器の適切な使用方法を指導していくことも必要です。

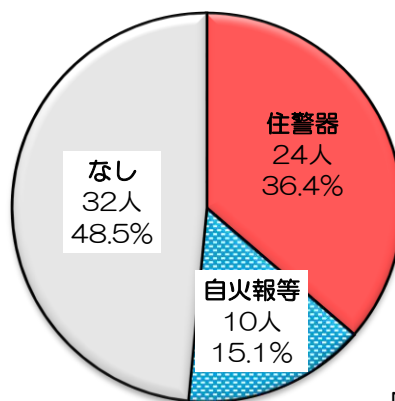
4 住宅用火災警報器の状況

(1) 住宅火災の内訳

住宅火災 1,484 件と住宅火災による死者 66 人(自損を除く)を住宅用火災警報器等の設置有無別にみると、住宅用火災警報器(以下「住警器」という。)が設置されていた住宅火災は 615 件(41.4%)、死者は 24 人(36.4%)発生しており、自動火災報知設備等(以下「自火報等」)が設置されていた住宅火災は 461 件(31.1%)、死者は 10 人(15.1%)、未設置の住宅火災は 408 件(27.5%)、死者は 32 人(48.5%)となっています(図 1-27、図 1-28)。



N=1,484



N=66

図 1-27 住警器等設置状況別住宅火災件数

図 1-28 住警器等設置状況別死者数

住宅火災の件数に占める住警器等設置状況別の死者及び負傷者の発生状況を見ると、住警器または自火報等を設置している火災では、死者発生件数(死者及び負傷者の両方が発生した火災を含む)が 33 件(3.1%)、負傷者のみの発生件数が 249 件(23.1%)発生しています。

一方、どちらも設置していない(以下「未設置」という。)住宅では、死者発生件数が 30 件(7.3%)、負傷者のみ発生件数が 117 件(28.7%)発生しています。このことから、住警器等設置なしの方が、死者が発生している件数の割合が高いことが分かります(図 1-29)。

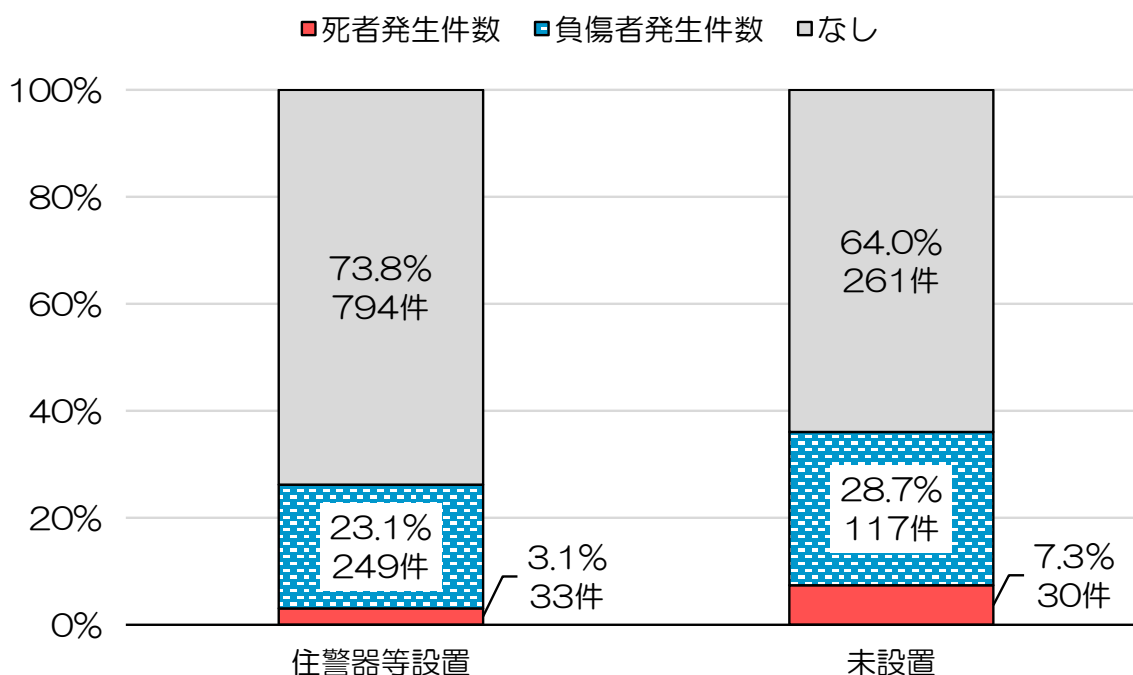


図 1-29 住警器等設置状況別の死者及び負傷者発生件数の割合

(2) 住警器設置有無別の比較

住警器等設置の住宅における火災と、未設置の住宅における火災を比較してみると、火災1件当たりの平均焼損床面積は、住警器等設置住宅においては、4.6㎡となっているのに対し、未設置住宅では13.9㎡と約3.0倍に、火災1件当たりの平均損害額でも、住警器等設置住宅は約122万円であるのに対し、未設置住宅では約254万円であり、約2.1倍と未設置住宅における被害が大きいことを示しています（図1-30、図1-31）。

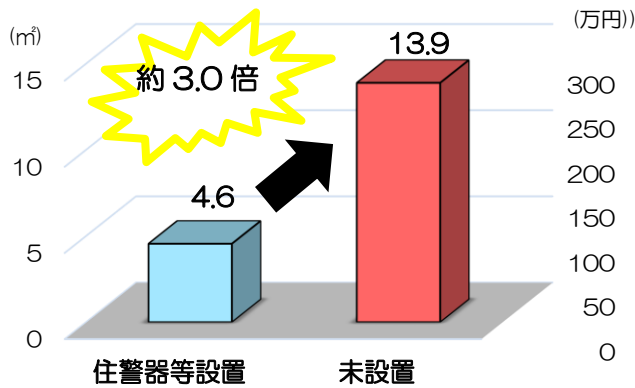


図1-30 住警器等設置有無別

火災1件あたりの平均焼損床面積

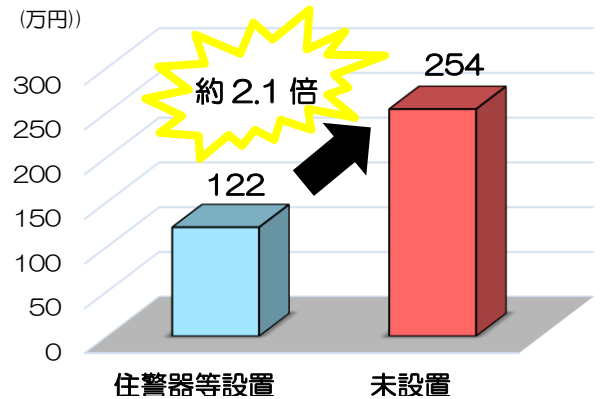


図1-31 住警器等設置有無別

火災1件あたりの平均損害額

一方、住宅火災による死者発生状況を住警器等の設置状況別にみると、火災100件あたりでは住警器等設置住宅で3.1件、住警器等未設置住宅の場合は7.4件で死者が発生しており、住警器等設置住宅の約2.4倍の死者が発生しています（図1-32）。

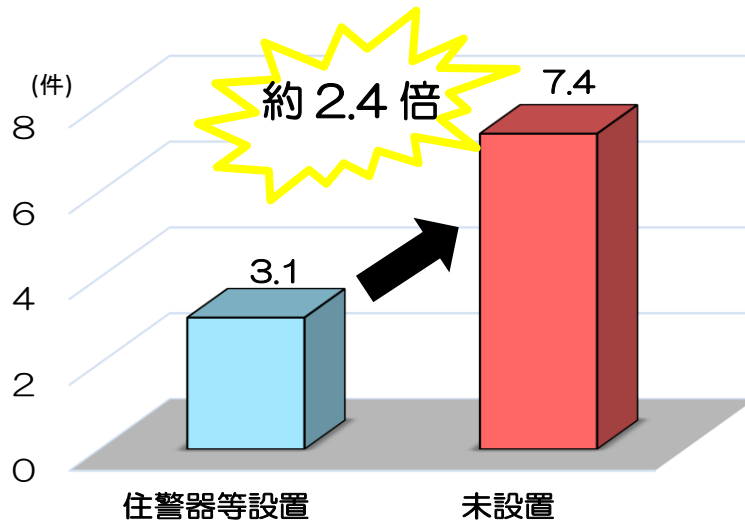
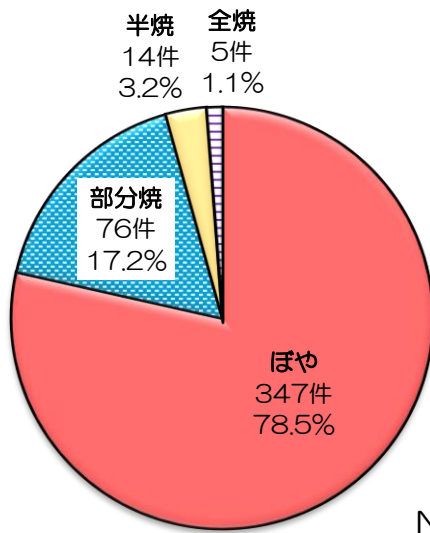


図1-32 住警器等設置有無別火災100件あたりの死者発生件数

(3) 全部設置と一部設置の比較

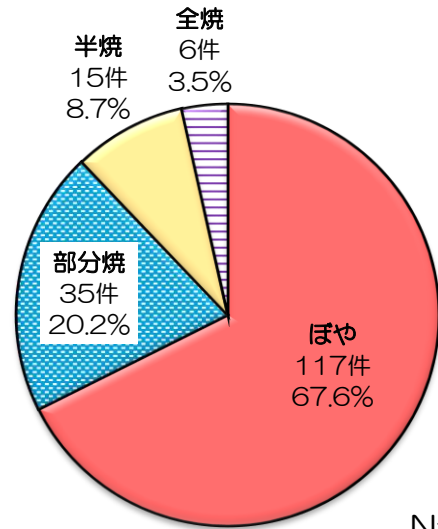
住警器が設置されていた住宅の615件のうち、条例基準どおりにすべての居室、台所、階段に設置されている住宅（以下「全部設置」という。）と、一部のみに設置されている住宅（以下「一部設置」という。）を比較すると、住警器が設置されていた住宅火災件数のうち、全部設置が442件（71.9%）、一部設置が173件（28.1%）となっています。

火災程度別にみると、全部設置だった火災442件中、半焼以上が19件（4.3%）に対し、住警器が一部設置だった火災173件中、半焼以上が21件（12.2%）です（図1-33、図1-34）。



N=442

図 1-33 住警器全部設置の焼損程度



N=173

図 1-34 住警器一部設置の焼損程度

住警器等設置状況別に死者の発生状況を比較すると、全部設置では 442 件中 12 件で死者が発生しており、一部設置では 173 件中 11 件で死者が発生しています。

100 件あたりの死者発生件数を比較すると、全部設置では 2.7 件に対して、一部設置では 6.4 件で、約 2.4 倍の差になっています（図 1-35）。

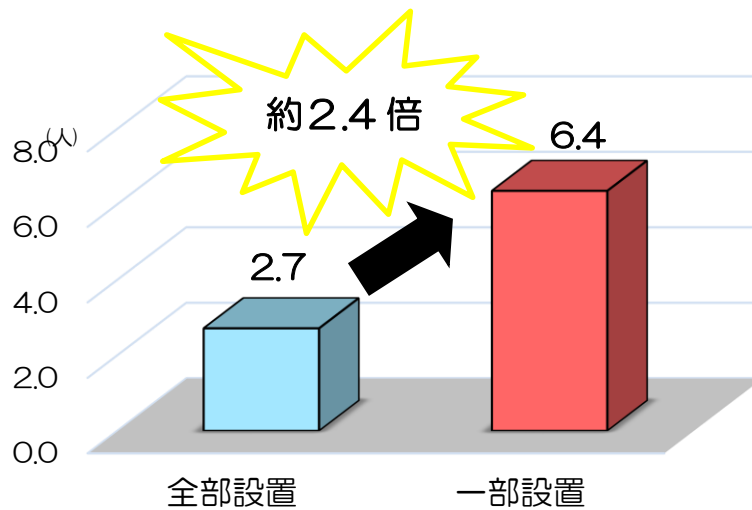


図 1-35 住警器設置状況別 100 件あたりの死者発生件数
(自損を除く)

(4) 奏功事例の内訳

平成 30 年中における住警器の作動により火災を未然に防いだ、若しくは、火災による被害を軽減した奏功事例は、171 件ありました。また、住警器等の設置率は 85.2% となっています (図 1-36)。

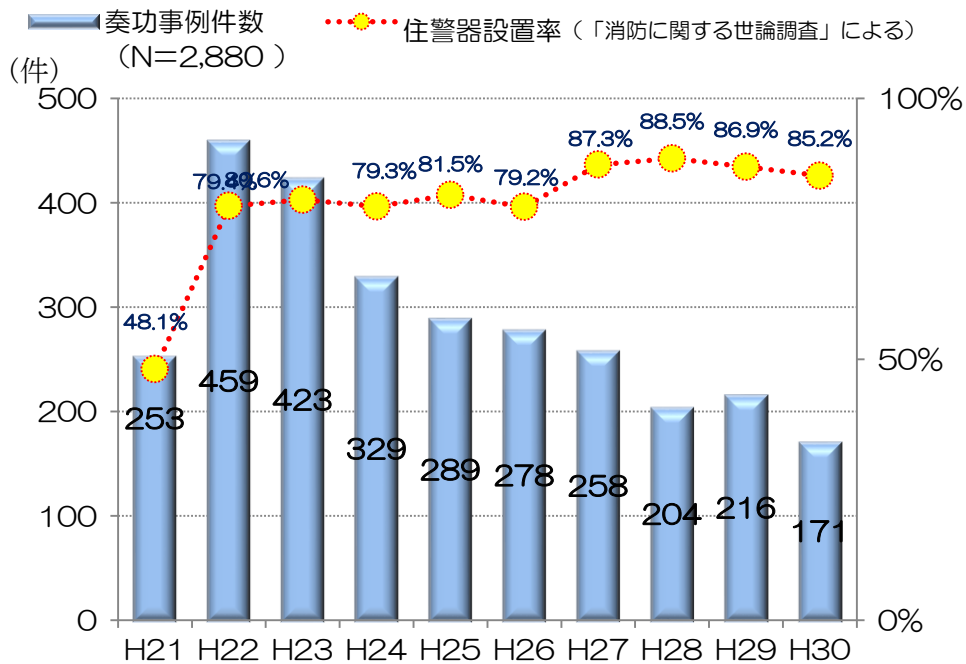
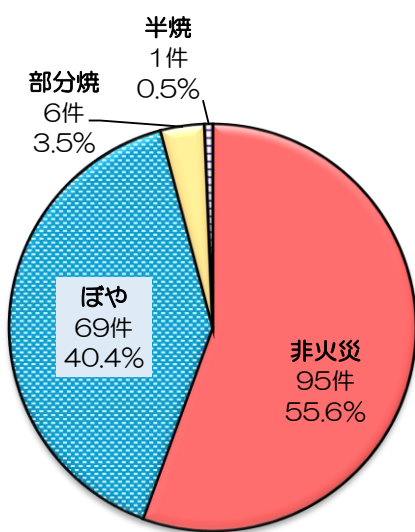


図 1-36 住警器奏功事例・設置率の推移

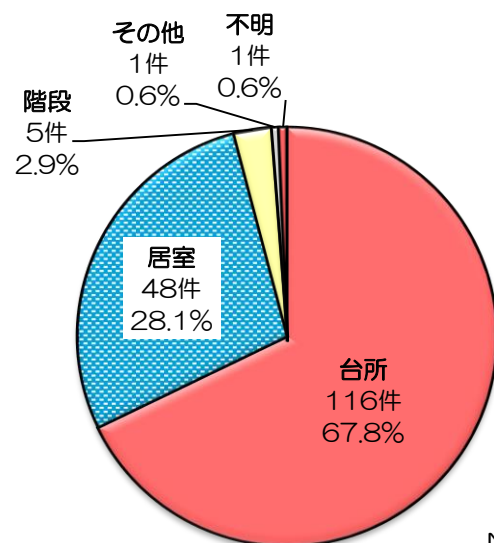
平成 30 年中における住警器の奏功事例の焼損程度別では、火災に至らなかった事例が 95 件 (55.6%) と約 6 割を占めています。また、火災に至った事例についてもぼやが 69 件 (40.4%) と 4 割を占めており、住警器による火災の早期発見の効果が表れています (図 1-37)。

奏功 (出火) 場所別では、台所が 116 件 (67.8%)、次いで居室は 48 件 (28.1%) となっています (図 1-38)。



N=171

図 1-37 焼損程度別奏功事例



N=171

図 1-38 奏功 (出火) 箇所別奏功事例

住警器の鳴動に気付いた人をみると、居住者が81人（47.4%）で、居住者以外の隣人・通行人は72人（42.1%）となっています（図1-39）。

※「両方」とは、居住者及び居住者以外が同時に気付いた場合です。

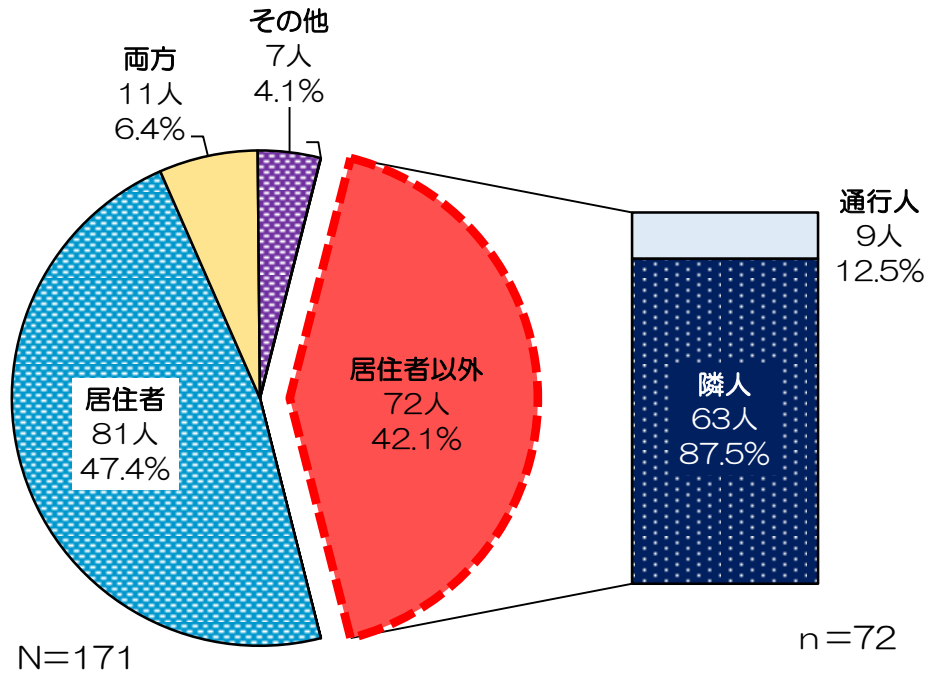


図1-39 住警器の鳴動に気付いた人

第2章 放火火災の実態

1 放火火災の概要

平成30年中の火災件数3,973件のうち放火（放火の疑いを含む、以下「放火」という。）火災は705件発生しました。前年より191件減少しており、総火災件数に占める割合は3.6%減少しました（図2-1）。

また、放火火災705件の内訳は、建物火災276件（39.2%）、その他火災412件（58.4%）、車両火災17件（2.4%）となっています。

※ 治外法権及び管外からの延焼火災は、総火災件数のみ計上しています。

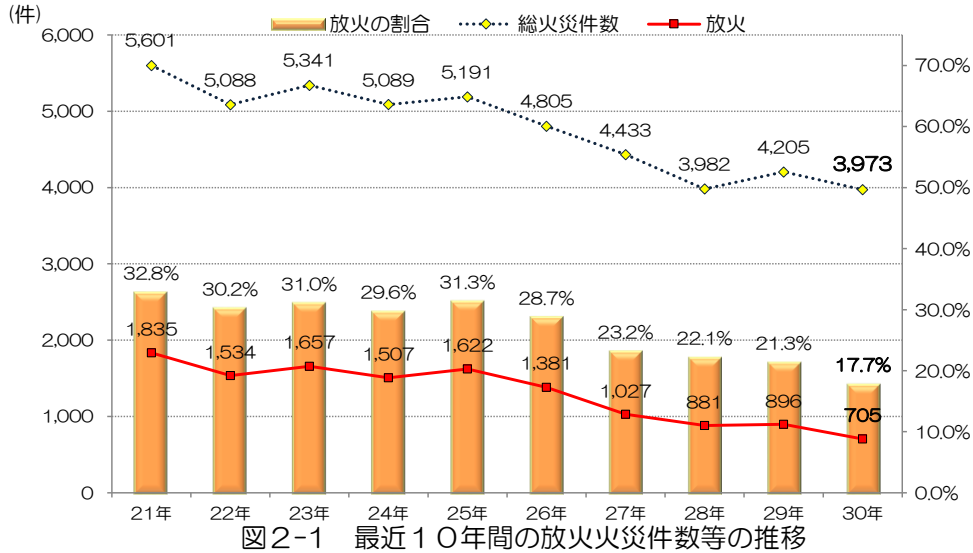


図2-1 最近10年間の放火火災件数等の推移

2 放火火災の状況

(1) 月別発生状況

月別の件数をみると、1月、2月、3月、5月、12月に特に多く発生しています。

また、放火火災の割合をみると5月の割合が特に高くなっています。

放火火災以外の発生状況と同様に、放火火災も火災多発期（12月1日から3月31日まで）を含む期間中、あるいはその前後の時期に多く発生していることがわかります（図2-2）。

※ 治外法権及び管外からの延焼火災は、総火災件数のみ計上しています。

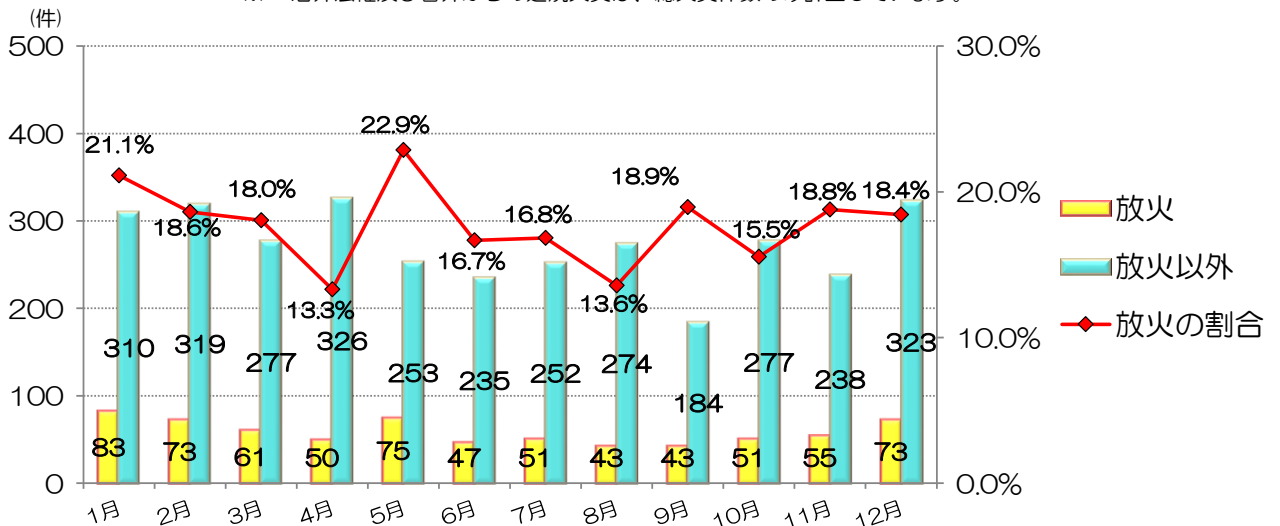


図2-2 月別放火火災発生状況

(2) 曜日別発生状況

曜日別にみると、各曜日ともあまり大きな差はみられませんが、日曜日は他の曜日と比べて若干多く発生しており、放火の割合も高くなっています（図2-3）。

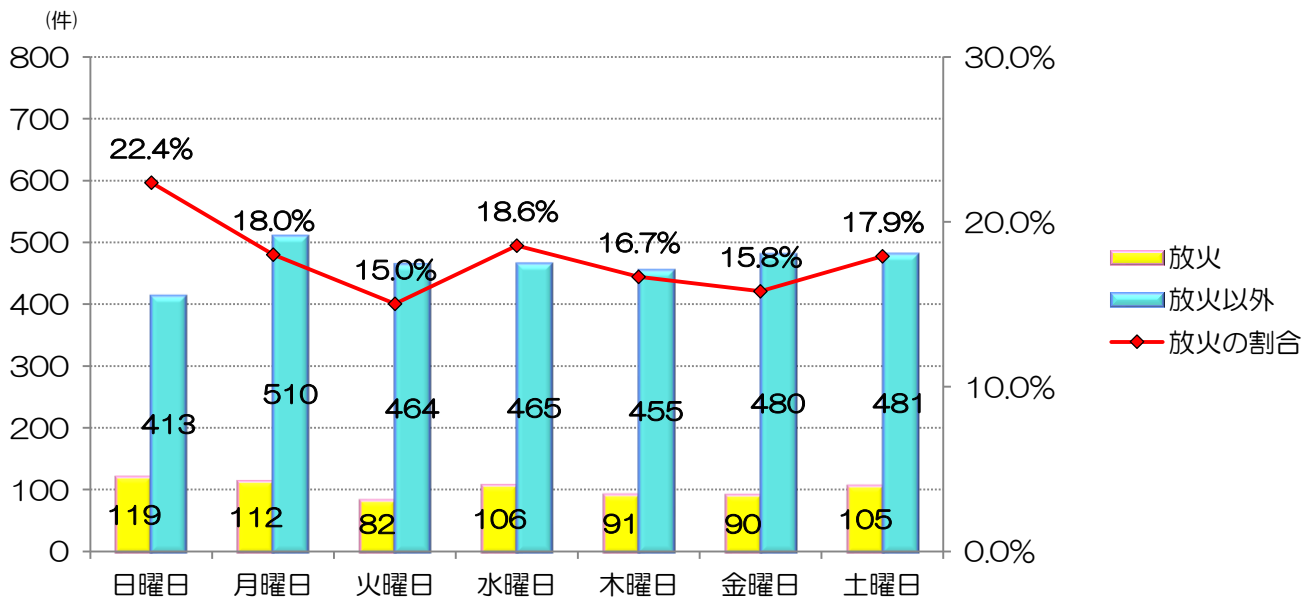


図2-3 曜日別放火火災発生状況

(3) 時間帯別発生状況

出火時間が不明であった207件を除いた498件の放火火災について、時間帯別にみると、0時～3時台、16時～18時台及び22時～23時台に放火火災の件数及び割合が高くなっています（図2-4）。

放火以外の火災は、人々が活動をする朝から夜にかけて多く発生するのに対し、放火火災では、日が沈む夕方から人々が睡眠する深夜にかけて多く発生するという特徴となっています。

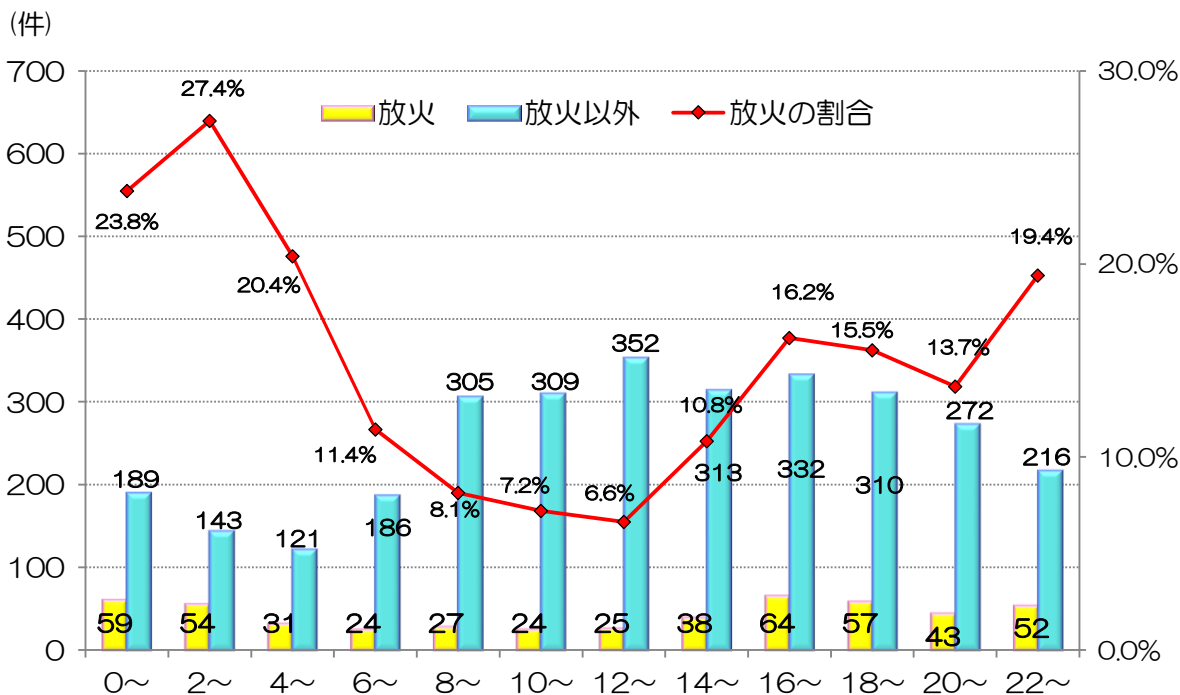


図2-4 時間帯別放火火災発生状況

(4) 連続放火火災の発生状況

平成30年中(同一日内とその翌日までに、同一地域内で5件以上放火された連続放火火災)は3回発生しました(表2-1)。

表2-1 主な連続放火火災の発生状況

回数	発生月	区市町村	出火箇所	焼損物件	連続件数
1	1月	日野市	公園	植木、枯草、枯葉	6
2	2月	北区	階段、廊下	貼り紙、誘導標識	6
3	9月	大田区	公園	タイヤ、傘、ごみ	5

(5) 主な火元建物用途

放火火災 705 件のうち、建物から出火した放火火災 246 件を主な建物用途別にみると、住宅 30 件（12.2%）、共同住宅等 86 件（35.0%）、その他 130 件（52.8%）となっており、約 5 割が住宅・共同住宅から発生しています（表 2-2、図 2-5）。

表 2-2 火元建物用途発生状況

	火元用途	放火	建物から出火した火災	放火件数 / 火災件数
居住系	住宅	30	539	5.6%
	共同住宅等	86	945	9.1%
事業系	百貨店・物販等	7	94	7.4%
	ホテル・簡易宿泊所	2	19	10.5%
	病院等	3	21	14.3%
	事務所	36	142	25.4%
	飲食店	4	330	1.2%
	遊技場	3	13	23.1%
	倉庫	5	15	33.3%
	学校	8	40	20.0%
	作業所	2	90	2.2%
	停車場	2	16	12.5%
	その他	7	143	4.9%
その他	共用部分	36	145	24.8%
	附属建物等	10	24	41.7%
	工事中の建物	2	22	9.1%
	空家	3	11	27.3%
合計		246	2,609	9.4%

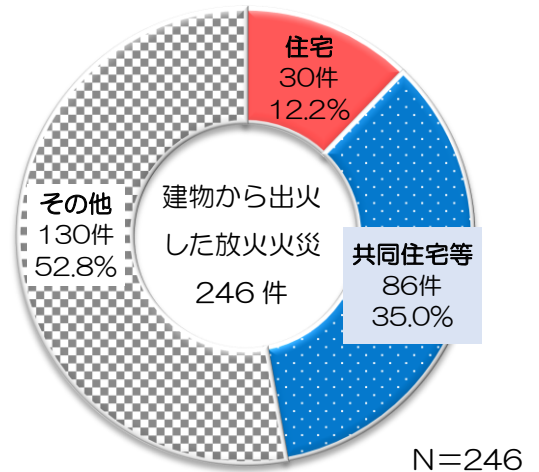


図 2-5 建物から出火した放火火災内訳

(6) 主な放火場所と着火物

主な放火場所別（出火箇所）にみると、放火火災に占める建物関係（主として建物の箇所）は 256 件（36.3%）と約 4 割を占めています。

建物関係 256 件のうち最も多い場所は、共用部分 110 件（43.0%）、次いで居住部分 61 件（23.8%）で、建物関係の約 7 割を占めています。

建物関係以外（主として建物以外の箇所）は 449 件（63.7%）発生し、敷地内 169 件（37.6%）、公園 125 件（27.8%）、道路 69 件（15.4%）などとなっています。

また、放火火災 705 件を着火物別にみると、紙・紙製品類、ごみくず等、合成樹脂製品等、を合わせると 384 件（54.5%）と半数以上を占めています（表 2-3）。

表2-3 主な放火場所と着火物

着火物 放火場所		紙・紙 製品	ごみく ず等	合成樹 脂製品 等	繊維類	枯草	くず類	車両関 係	その他	不明	合計
		建物関係	共用部分	40	18	23	14	0	9	0	4
住宅部分	20		0	0	26	0	2	0	4	9	61
車庫・駐車場	5		1	6	1	0	2	0	0	0	15
建物の外周部	2		2	1	1	0	0	0	0	1	7
物置・倉庫	4		8	2	2	0	1	0	2	3	22
ベランダ・屋上	3		0	2	3	0	1	0	1	0	10
その他	15		2	2	6	0	1	0	5	0	31
小計	89		31	36	53	0	16	0	16	15	256
建物関係以外	車両	0	0	4	1	0	0	4	0	1	10
	敷地内	37	24	35	12	9	13	4	32	3	169
	公園・墓地	16	20	4	5	14	15	0	50	1	125
	道路	12	23	13	8	1	6	1	4	1	69
	河川敷	0	5	0	3	9	1	0	2	1	21
	屋外ごみ捨場	3	10	2	0	0	1	0	0	1	17
	その他	4	7	9	1	4	4	0	9	0	38
	小計	72	89	67	30	37	40	9	97	8	449
合計	161	120	103	83	37	56	9	113	23	705	

事例編

1 主な住宅火災の事例

(1) たばこ

【事例1】たばこの不始末により死者が発生した住宅火災の事例			
火災の程度	半焼	焼損物件	床面積25㎡焼損、表面積15㎡焼損
死傷者の発生状況	死者あり	住宅用火災警報器等の設置状況	なし
<p>この火災は、共同住宅で一人暮らしの居住者（男性・70代）が、居室内でたばこを吸った後、吸殻がいっぱいの灰皿でもみ消したが、完全に消火されていなかったため出火しました。この居住者は、全身を火傷したため亡くなりました。</p> <p>隣人が、外出先から帰宅した際に、火元部屋から爆発音が聞こえてきたため確認すると、南側窓から火が噴きだしているのを発見したため、火事だと思い、119番通報をしました。</p>			

【事例2】寝たばこにより死者が発生した住宅火災の事例			
火災の程度	全焼	焼損物件	床面積62㎡焼損、表面積99㎡焼損
死傷者の発生状況	死者あり	住宅用火災警報器等の設置状況	なし
<p>この火災は、住宅で一人暮らしの居住者（男性・60代）が、居室で飲酒喫煙をしている間に寝てしまい、布団等にたばこの火種が落下し、無炎燃焼を継続した後に火災となり出火したことにより火災となりました。この居住者は、全身を火傷したため亡くなりました。</p> <p>隣棟建物の居住者は、自宅にいる際に臭気を感じたため、外を確認すると隣の建物から火と煙が出ているのを確認したため、119番通報をしました。</p>			

(2) こんろ

【事例1】こんろの周りの可燃物に出火し死者が発生した住宅火災の事例			
火災の程度	全焼	焼損物件	床面積94㎡等焼損
死傷者の発生状況	死者あり	住宅用火災警報器等の設置状況	住宅用火災警報器あり
<p>この火災は、高齢者を含む世帯の住宅の居住者（女性・60代）が、使用中のガスこんろの幅より大きい鍋を使用して調理していたところ、こんろの火が周りの可燃物に着火し、火災となりました。この居住者は、全身を火傷したため亡くなりました。</p> <p>隣棟建物の居住者は、外出した際に臭気を感じたため、周囲を確認したところ火元建物の窓から煙が出ているのを発見しました。火元部屋の玄関を開けようとしたが施錠されており開けなかったため、隣人宅のインターフォンを鳴らし火事であることを知らせました。その話を聞いた隣人が、119番通報をしました。</p>			

【事例2】着衣着火により死者が発生した住宅火災の事例			
火災の程度	ぼや	焼損物件	着衣及び収容物若干焼損
死傷者の発生状況	死者あり	住宅用火災警報器等の設置状況	住宅用火災警報器あり
<p>この火災は、共同住宅で一人暮らしの居住者（男性・80代）が、ガスこんろで調理をしている際に、炎に着衣が接触したため着火し、火災となりました。</p> <p>火元建物の隣人は、自宅にいた際に焦げ臭いにおいがしたので、廊下に出て確認すると火元部屋から煙が出ていました。その後、大家さんに知らせ合鍵で中を確認すると白煙が充満していたため、119番通報をしました。</p>			

(3) ストープ

【事例1】電気ストーブに可燃物が接触することにより死者の発生した住宅火災の事例			
火災の程度	部分焼	焼損物件	床面積23㎡焼損
死傷者の発生状況	死者あり	住宅用火災警報器等の設置状況	住宅用火災警報器あり
<p>この火災は、住宅で一人暮らしの居住者（女性・70代）が、部屋で就寝中に使用していた電気ストーブに何らかの原因で掛布団が接触したことから、火災となりました。この居住者は、火傷などにより亡くなっています。</p> <p>隣人は、就寝中に住宅用火災警報器が鳴動音で目が覚めて、確認すると部屋の天井部分で白煙が充満しているのを確認しました。部屋の外に出て、火元部屋をノックして確認すると、煙は見えないがドアが熱く、熱気を感じたため、火事だと思い119番通報をしました。</p>			

【事例2】石油ストーブに可燃物が落下したことにより死者の発生した住宅火災の事例			
火災の程度	半焼	焼損物件	床面積30㎡焼損
死傷者の発生状況	死者あり	住宅用火災警報器等の設置状況	住宅用火災警報器あり
<p>この火災は、高齢者世帯の住宅の居住者（男性・80代）が、石油ストーブの上方で洗濯物を乾かしていたところ、何らかの要因で落下したため着火し、火災となりました。この居住者は、一酸化炭素中毒により亡くなっています。</p> <p>居住者が、1階に居る際に2階からドンツという物音がしたので、2階を確認すると石油ストーブ付近から炎が出ていたため、火事だと思い、119番通報をしました。</p>			

(4) 着衣着火

【事例1】こんろによる着衣着火の住宅火災の事例			
火災の程度	ぼや	焼損物件	着衣
死傷者の発生状況	負傷者あり	住宅用火災警報器等の設置状況	住宅用火災警報器あり
<p>この火災は、住宅の居住者（女性・70代）が、台所で調理している際に、首に巻いていたマフラーがこんろの火に接触したことにより、着火しました。</p> <p>居住者の家族は、住宅用火災警報器の鳴動音と叫び声が聞こえたため、台所に行くと着衣に火がついているのを確認しました。居住者の家族は、浴室に行き、洗面器にお湯を汲んで消火し、火が収まったところで上衣を脱がせ、燃えていた可燃物を住宅用消火器により完全に消火しました。その後、浴室まで移動し、火傷をした場所をシャワーで冷却消火したのちに、119番通報しました。</p>			

【事例2】ロウソクによる着衣着火の住宅火災の事例			
火災の程度	ぼや	焼損物件	着衣等
死傷者の発生状況	負傷者あり	住宅用火災警報器等の設置状況	なし
<p>この火災は、住宅の居住者（女性・90代）が、線香をあげる際に、誤ってロウソクの火に着衣が接触したことにより、着火しました。</p> <p>居住者は、着衣にこんろの火が燃え移ったため、居住者の家族に助けを求め、駆けつけた居住者の家族により、付近にあったひざ掛けを活用して、火をはたいて消火しました。</p> <p>その後、居住者の娘が119番通報をしました。</p>			

【事例3】こんろによる着衣着火の住宅火災の事例			
火災の程度	ぼや	焼損物件	着衣
死傷者の発生状況	負傷者あり	住宅用火災警報器等の設置状況	自動火災報知設備あり
<p>この火災は、住宅の居住者（男性・60代）が、台所で調理している際に、冷蔵庫から材料を取り出そうと後ろを向いたところ、着衣がこんろの火に接触したことにより、着火しました。</p> <p>居住者は、燃え移った衣服を自力で脱ぎ、台所のシンクに入れ、水道水で消火をしました。</p> <p>その後、居住者から受傷したことを聞いた居住者の家族が、救急相談センターに相談したことから、火災が発覚しました。</p>			

【事例4】こんろによる着衣着火の住宅火災の事例			
火災の程度	ぼや	焼損物件	着衣
死傷者の発生状況	負傷者あり	住宅用火災警報器等の設置状況	なし
<p>この火災は、共同住宅の居住者（女性・70代）が、ガスこんろの火を活用し、たばこに火を点けようとしたところ、ガスこんろの火に着衣が接触したことにより、着火しました。</p> <p>居住者の家族が痛いと助けを求める声を聞いて駆けつけると、着衣から炎が上がっていたため、台所の水道水を活用して初期消火を行うとともに、119番通報をしました。</p>			

【事例5】たばこによる着衣着火の住宅火災の事例			
火災の程度	ぼや	焼損物件	着衣
死傷者の発生状況	負傷者あり	住宅用火災警報器等の設置状況	住宅用火災警報器あり
<p>この火災は、共同住宅の居住者（男性・30代）が、居室で喫煙していた際に、火のついたたばこを持ちながら、ベッドにもたれかかるようにして、座って寝ていたところ、たばこの火種が着衣に落下したことから着火しました。</p> <p>居住者の家族は、別の部屋に居たところ焦げ臭いにおいを感じたため、確認してみると居住者の胸のあたりから煙が上がっていた。居住者を起こし、上衣を脱がせ台所に搬送して、水道水により消火しました。その後、居住者が胸部の痛みを訴えたため、居住者の家族が119番通報をしました。</p>			

【事例6】こんろによる着衣着火の住宅火災の事例			
火災の程度	ぼや	焼損物件	着衣
死傷者の発生状況	負傷者あり	住宅用火災警報器等の設置状況	自動火災報知設備あり
<p>この火災は、住宅の居住者（女性・40代）が台所で調理している際に、ガスこんろの奥にある調味料を取ろうと手を伸ばしたところ、着衣にガスこんろの火が接触したことにより、着火しました。</p> <p>居住者は、自身の着衣を脱ぎ、台所のシンクに入れて水道水により消火しました。居住者の家族が帰宅するまで火傷をしたところを冷却していましたが、痛みが激しいため家族が119番通報をしました。</p>			

【事例7】 灯明による着衣着火の住宅火災の事例			
火災の程度	部分焼	焼損物件	焼損床面積36㎡、焼損表面積4㎡
死傷者の発生状況	死傷者あり	住宅用火災警報器等の設置状況	なし
<p>この火災は、住宅の居住者（女性・80代）が、仏壇の灯明に火を点けようとした際に、着衣に火が接触し、着火しました。この居住者は、全身を火傷したため亡くなりました。</p> <p>近隣建物の居住者は、自宅にいと焦げ臭いにおいがしたので、窓を開けて外を確認すると、火元建物2階の窓から炎が出ていたため、119番通報をしました。</p>			

(4) その他の出火原因

【事例1】 火遊びによる住宅火災の事例			
火災の程度	部分焼	焼損物件	床面積10㎡
死傷者の発生状況	負傷者あり	住宅用火災警報器等の設置状況	住宅用火災警報器あり
<p>この火災は、住宅の居住者（男児・小学生）が紙コップにライターで火を点けて火遊びをしていたところ、近くにあった収納ケースに着火しました。</p> <p>居住者の母親は、1階の台所に居たところ息子が「火事だ」と伝えてきたので、2階に確認に行ってみると住宅用火災警報器の鳴動音とともに黒い煙が出ているのを発見しました。母親は、子供を全員避難させてから、119番通報をしました。</p>			

【事例2】 ロウソクによる住宅火災の事例			
火災の程度	ぼや	焼損物件	換気扇1、洋式トイレ1、ロータンク1
死傷者の発生状況	負傷者なし	住宅用火災警報器等の設置状況	なし
<p>この火災は、共同住宅の居住者（男性・20代）が、ロウソクの火を消し忘れたため時間の経過とともにロウソクが短くなり、プラスチック製のふたに接触し、着火しました。</p> <p>居住者は友人とテレビゲームを行っている際に、部屋の中に煙が漂ってきたので確認すると、トイレのタンクが燃えているのを発見したため、119番通報をしました。</p> <p>その後、友人は、近くに置いてあったペットボトルの水をかけて初期消火を行いました。</p>			

【事例3】 ロウソク（アロマキャンドル）による住宅火災の事例			
火災の程度	ぼや	焼損物件	マットレス若干、シーツ若干、衣類若干
死傷者の発生状況	負傷者なし	住宅用火災警報器等の設置状況	自動火災報知機あり
<p>この火災は、共同住宅の居住者（女性・20代）が、ベッド上でアロマキャンドルに火を点けたまま入浴したところ、アロマキャンドルの火が近くにあったマットレスに着火しました。</p> <p>居住者は、入浴後アロマキャンドルの火がマットレス及び衣類燃え移っているのを発見したため、トイレにあった洗面器に水道水を汲み、水をかけて初期消火を行いました。</p> <p>隣人は、自動火災報知機が鳴動していたため、119番通報をしました。</p>			

【事例4】コードによる住宅火災の事例			
火災の程度	ぼや	焼損物件	床若干、テーブルタップ1
死傷者の発生状況	負傷者なし	住宅用火災警報器等の設置状況	住宅用火災警報器あり
<p>この火災は、共同住宅の居住者（男性・20代）が、テーブルタップと電源コード部の接続箇所がねじれや引っ張り等により絶縁被覆が破れて半断線した状態だったため、発熱し被覆を過熱させコードが発火して出火しました。</p> <p>居住者は、テーブルタップに掃除機のコンセントを接続して、掃除中に「パチン」という音がしたので周囲を確認したところ、廊下の床が黒く焼け焦げているのを発見しました。さらにブレーカーが切断されたので復旧させたところ、再度「パチン」という音がしたため、再度確認するとほかにも床が焦げているところを発見したので、119番通報をしました。</p>			

【事例5】差し込みプラグのトラッキングによる住宅火災の事例			
火災の程度	ぼや	焼損物件	内壁若干、電気配線等
死傷者の発生状況	負傷者なし	住宅用火災警報器等の設置状況	住宅用火災警報器あり
<p>この火災は、住宅の居住者（女性・60代）が、居室内で使用していた電気配線の差し込みプラグからトラッキング現象により出火し、火災となりました。</p> <p>居住者の家族が1階居室にいた際に、突然ブレーカーが落ちたため、玄関にあるブレーカーを上げたところ、火花の音が聞こえてきたため確認してみると、テレビ裏のコンセント付近から火が出ているのを発見しました。その後、居住者は台所で鍋に水を汲み、水をかけて初期消火を行いました。</p> <p>近隣建物居住者は、外出先から帰宅した際に、火元建物1階窓より煙が出ていたので、119番通報をしました。</p>			

2 住宅用防災機器等の主な奏功事例

(1) こんろ

【事例1】住宅用火災警報器の鳴動により早い発見、通報につながり火災を未然に防いだ事例					
火災の程度	非火災		死傷者の発生状況	負傷者なし	
奏功機器・設置場所（設置状況）			住宅用火災警報器（煙式）・台所（全部設置）		
発見者	居住者	通報者	居住者	初期消火	なし
<p>この事例は、住宅の居住者（女性・80代）が、台所で調理中にその場を離れてしまったため、鍋が過熱され続け空焚きとなり、発生した煙を感知した住宅用火災警報器が鳴動しました。</p> <p>居住者は、住宅用火災警報器の鳴動音に気づき、台所に戻りガスこんろの火を止めたため、火災には至りませんでした。</p> <p>居住者は、ガスこんろの火を止めた後、110番通報し、警察から消防に通報がありました。</p>					

【事例2】住宅用火災警報器の鳴動により早い発見、通報につながり火災を未然に防いだ事例					
火災の程度	非火災		死傷者の発生状況	負傷者なし	
奏功機器・設置場所（設置状況）			住宅用火災警報器（煙式）・台所（全部設置）		
発見者	居住者	通報者	居住者	初期消火	なし
<p>この事例は、共同住宅の居住者（女性・70代）が、台所で調理した後ガスこんろの火を消したと思ひ込み台所を離れたため、過熱され続け発生した煙を感知した住宅用火災警報器が鳴動しました。</p> <p>居住者は、住宅用火災警報器の鳴動音に気づき、台所に向かうと白煙が充満し、煙が出ているのを見つけたため、ガスこんろの火を消した後、119番通報をしました。</p>					

【事例3】住宅用火災警報器の鳴動により早い発見、通報につながり火災を未然に防いだ事例					
火災の程度	非火災		死傷者の発生状況	なし	
奏功機器・設置場所（設置状況）			住宅用火災警報器（煙式）・台所（一部設置）		
発見者	隣人	通報者	隣人	初期消火	なし
<p>この事例は、住宅の居住者（男性・40代）が、電気こんろの火を消すのを忘れて外出してしまい、鍋が過熱され続け空焚きとなり、発生した煙を感知した住宅用火災警報器が鳴動しました。</p> <p>隣人は、居室にいたところ住宅用火災警報器の鳴動音が聞こえてきたため、建物所有者に知らせました。その後、所有者が合鍵を使って火元部屋を確認したところ、白煙が充満していたため、119番通報をしました。</p>					

【事例4】住宅用火災警報器の鳴動により早い発見、通報につながり火災を未然に防いだ事例					
火災の程度	非火災		死傷者の発生状況	なし	
奏功機器・設置場所（設置状況）			住宅用火災警報器（煙式）・台所（一部設置）		
発見者	通行人	通報者	通行人	初期消火	なし
<p>この事例は、共同住宅の居住者（男性・80代）が、鍋を火にかけてそのまま就寝してしまったことにより、鍋が過熱され続け発生した煙を感知した住宅用火災警報器が鳴動しました。</p> <p>通行人は、新聞配達のためドアに近づくと、室内から住宅用火災警報器が鳴っているのが聞こえました。居住者に知らせるためドアを叩いたが応答がなかったため、119番通報をしました。</p> <p>消防隊が到着後、室内を確認しましたが、火災ではありませんでした。</p>					

【事例5】エアゾール式簡易消火具による初期消火により火災の延焼を防いだ事例					
火災の程度	ぼや		死傷者の発生状況	なし	
奏功機器・設置場所（設置状況）			住宅用火災警報器なし		
発見者	居住者	通報者	居住者家族	初期消火	あり
<p>この火災は、住宅の居住者（女性・70代）が台所のグリルで調理中に、その場を離れて家族を呼びに行き、台所に戻った際に、グリルの排煙口より炎が上がっているのを発見したため、居住者の家族に知らせ、台所に置いてあったエアゾール式簡易消火具で初期消火を行い、火災の延焼を防ぎました。その後、居住者の家族が119番通報しました。</p>					

(2) たばこ

【事例 1】住宅用火災警報器の鳴動により早い発見、通報につながった事例					
火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	なし		
奏功機器・設置場所（設置状況）	住宅用火災警報器（煙式）・居室（全部設置）				
発見者	隣人	通報者	隣人	初期消火	なし
<p>この火災は、住宅の居住者（女性・20代）が居室で、最後に吸ったたばこが完全に消えていなかったため、灰皿に残っていた吸殻に着火し、出火しました。</p> <p>隣人 A は自宅にいたところ、住宅用火災警報器の鳴動音が聞こえてきたため、外に出て確認したところ火元部屋から住宅用火災警報器の鳴動音と焦げ臭い臭気を感じました。</p> <p>外出先から帰宅した隣人 B は、隣人 A から状況を聞き、自身で住宅用火災警報器の鳴動音と焦げ臭いにおいを確認したため、119番通報しました。</p>					

【事例 2】住宅用火災警報器の鳴動により早い発見、通報、初期消火につながった事例					
火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	なし		
奏功機器・設置場所（設置状況）	住宅用火災警報器（煙式）・居室（全部設置）				
発見者	居住者	通報者	居住者	初期消火	あり
<p>この火災は、共同住宅の居住者（男性・70代）が、布団の上でたばこ吸った際に、火種が落下し無煙燃焼を継続して布団に着火し、火災となりました。</p> <p>隣人 A が居室にいた際に、住宅用火災警報器の鳴動音が聞こえてきたため、火元部屋を確認すると煙が出ているのを発見し、隣人 B に火災であることを知らせた後、共用の廊下に設置されている消火器で初期消火を行いました。隣人 B は、隣人 A の依頼を受けて119番通報をしました。</p>					

(3) ストープ

【事例 1】住宅用火災警報器の鳴動により早い発見、通報、初期消火につながった事例					
火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	あり		
奏功機器・設置場所（設置状況）	住宅用火災警報器（煙式）・居室（全部設置）				
発見者	友人	通報者	友人	初期消火	あり
<p>この火災は、共同住宅一人暮らしの居住者宅に泊まりに来ていた友人（男性・30代）が就寝中、掛布団が寝返り等をした際に、電気ストーブに接触し着火し、火災となりました。</p> <p>居住者の友人は、住宅用火災警報器の鳴動音を聞き、周囲を確認したところ掛布団が燃えているのを確認しました。その後、居住者は燃えている掛布団を浴室に持っていき、湯船へ浸けて、初期消火を行いました。友人は、火傷の痛みが引かないため救急相談センターに相談をしたことから、火災が発覚しました。</p>					

【事例 2】連動式の住宅用火災警報器の鳴動により早い発見、通報につながった事例					
火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	なし		
奏功機器・設置場所（設置状況）	住宅用火災警報器（煙式）・寝室（全部設置）				
発見者	居住者	通報者	居住者家族	初期消火	あり
<p>この火災は、共同住宅の居住者（女性・20代）が2階の寝室で就寝中、布団の脇で使用していた電気ストーブに、寝返りなどによりベッドから落ちた掛け布団が接触したため着火し、火災となりました。</p> <p>居住者は、住宅用火災警報器の鳴動音で目が覚め、周囲を確認すると、掛布団から煙が立ち上がっているのを確認しました。同時に、1階の居室の連動式の住宅用火災警報器が鳴動したため、1階に居た居住者家族もすぐに2階の寝室に駆けつけることが出来ました。その後、居住者家族が、燃えている掛布団を浴室に運び、湯船へ浸けて初期消火を行い、119番通報をしました。</p>					

(4) 放火

【事例 1】住宅用火災警報器の鳴動により早い発見、通報につながった事例					
火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	あり		
奏功機器・設置場所（設置状況）	住宅用火災警報器（煙式）・居室（全部設置）				
発見者	居住者家族	通報者	居住者家族	初期消火	あり
<p>この火災は、住宅の居住者（女性・20代）が2階の居室で、床に置かれた衣類にライターで火を点けたため、火災に至りました。</p> <p>居住者家族は、住宅用火災警報器の鳴動音が聞こえてきたため、確認すると衣類から炎が立ち上がっているところを発見しました。居住者家族は、近くにあったペットボトルの水を掛けて初期消火し、119番通報をしました。</p>					

(5) その他

【事例 1】住宅用火災警報器により火災の早い発見、通報、初期消火につながった事例					
火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	なし		
奏功機器・設置場所（設置状況）	住宅用火災警報器（煙式）・居室（全部設置）				
発見者	居住者	通報者	居住者	初期消火	あり
<p>この火災は、共同住宅の居住者（男性・50代）の居室において、コードを屈曲している状態で使用していたことから半断線により発熱及び短絡し、火災となりました。</p> <p>隣人 A は、外出する際に住宅用火災警報器の鳴動音に気付き、廊下に出て確認すると白煙が充満していたため、隣人 B に知らせました。</p> <p>火災の知らせを聞いた隣人 B は、大声で火災の発生を知らせた後に、自身の携帯電話で119番通報しました。同じく火災の知らせを聞いた隣人 C は、火元部屋のドアを叩いて知らせたが、応答がなく扉から白煙が噴出していたため、廊下に設置してある消火器を活用して、初期消火を行いました。</p>					

【事例2】住宅用火災警報器により火災の早い発見、通報、初期消火につながった事例					
火災の程度	ぼや		死傷者の発生状況	なし	
奏功機器・設置場所（設置状況）			住宅用火災警報器（煙式）・居室（一部設置）		
発見者	居住者家族	通報者	居住者家族	初期消火	あり
<p>この火災は、住宅の居住者（女性・80代）が、仏壇の灯明に火をつけたままその場を離れたため、火災となりました。</p> <p>居住者家族はトイレに入っていた際に、住宅用火災警報器の鳴動音が聞こえてきたため、確認すると1階居室の仏壇から火が上がっているのを発見し、近くに置いてあった濡れた雑巾を仏壇に投げつけて消火を試みましたが消火できなかったため、浴室からバケツに水を汲んで、手桶を使用して初期消火を行いました。その後、居住者家族は煙が充満していたため、窓を開けて換気を行ったあとに、119番通報をしました。</p>					

【事例3】連動型住宅用火災警報器により火災の早い発見つながり火災を未然に防いだ事例					
火災の程度	非火災		死傷者の発生状況	なし	
奏功機器・設置場所（設置状況）			住宅用火災警報器（煙式）・台所（一部設置）		
発見者	居住者、	通報者	警備会社	初期消火	なし
<p>この事例は、住宅の居住者（男性・70代）が、1階台所でパンを温めようと電子レンジにセットし過熱していたところ、誤って長時間過熱したことにより電子レンジから発煙しました。</p> <p>居住者は、台所に設置されていた住宅用火災警報器の鳴動により、煙に気がつき電子レンジを停止しました。また、連動型住宅用火災警報器の発報を警備会社が受信したことにより、警備会社より119番通報に至りました。</p>					

資料編

1 区市町村別住宅火災状況

区	世帯数	建物から出火した火災件数	住宅火災件数	住宅火災の割合
千代田区	34,344	106	11	10.4%
中央区	89,132	87	15	17.2%
港区	143,898	147	39	26.5%
新宿区	216,529	129	61	47.3%
文京区	118,654	35	20	57.1%
台東区	116,158	62	33	53.2%
墨田区	147,988	58	34	58.6%
江東区	262,988	106	68	64.2%
品川区	215,574	81	46	56.8%
目黒区	154,592	54	37	68.5%
大田区	385,193	136	76	55.9%
世田谷区	473,163	119	82	68.9%
渋谷区	136,259	83	28	33.7%
中野区	201,754	53	40	75.5%
杉並区	317,929	77	58	75.3%
豊島区	177,671	83	40	48.2%
北区	193,253	71	45	63.4%
荒川区	114,209	38	26	68.4%
板橋区	303,189	89	68	76.4%
練馬区	365,725	79	60	75.9%
足立区	340,838	112	67	59.8%
葛飾区	229,819	81	60	74.1%
江戸川区	338,263	110	75	68.2%
特別区合計	5,077,122	1,996	1,089	54.6%

市町村	世帯数	建物から出火した火災件数	住宅火災件数	住宅火災の割合
八王子市	265,264	82	51	62.2%
立川市	89,838	52	32	61.5%
武蔵野市	75,921	23	11	47.8%
三鷹市	92,951	33	25	75.8%
青梅市	62,882	15	11	73.3%
府中市	123,648	34	23	67.6%
昭島市	53,490	24	17	70.8%
調布市	117,099	36	22	61.1%
町田市	194,121	47	31	66.0%
小金井市	59,548	20	15	75.0%
小平市	90,166	19	12	63.2%
日野市	87,444	22	17	77.3%
東村山市	72,222	16	12	75.0%
国分寺市	58,844	18	14	77.8%
国立市	37,179	16	10	62.5%
西東京市	95,878	14	12	85.7%
福生市	30,176	13	7	53.8%
狛江市	41,533	11	10	90.9%
東大和市	38,544	10	8	80.0%
清瀬市	35,246	16	13	81.3%
東久留米市	53,708	20	10	50.0%
武蔵村山市	31,378	13	6	46.2%
多摩市	71,114	28	11	39.3%
羽村市	25,561	8	5	62.5%
あきる野市	35,124	12	6	50.0%
瑞穂町	14,870	4	1	25.0%
日の出町	7,450	3	2	66.7%
檜原村	1,188	2	1	50.0%
奥多摩町	2,676	2	0	0.0%
多摩地区合計	1,965,063	613	395	64.4%
合計	7,042,185	2,609	1,484	56.9%

注 世帯数は平成31年1月1日現在のもの
「住民基本台帳による東京都の世帯と人口」
(東京都の統計ホームページ)による

2 区市町村別住宅火災による死者状況

区	死者発生 件数	住宅火災 件数	死者 発生率※ (平成30年)	死者 発生率※ (過去5年)
千代田区	0	11	0.0%	0.0%
中央区	1	15	6.7%	2.1%
港区	0	39	0.0%	1.1%
新宿区	2	61	3.3%	2.8%
文京区	1	20	5.0%	0.7%
台東区	3	33	9.1%	7.6%
墨田区	2	34	5.9%	4.5%
江東区	3	68	4.4%	4.5%
品川区	3	46	6.5%	6.5%
目黒区	1	37	2.7%	3.1%
大田区	3	76	3.9%	2.7%
世田谷区	5	82	6.1%	3.5%
渋谷区	0	28	0.0%	1.3%
中野区	1	40	2.5%	5.8%
杉並区	4	58	6.9%	4.4%
豊島区	0	40	0.0%	2.8%
北区	3	45	6.7%	6.6%
荒川区	2	26	7.7%	4.9%
板橋区	2	68	2.9%	4.5%
練馬区	4	60	6.7%	4.6%
足立区	6	67	9.0%	6.5%
葛飾区	3	60	5.0%	4.4%
江戸川区	2	75	2.7%	2.7%
特別区合計	51	1089	4.7%	4.1%

※ 死者発生率＝

死者が発生した住宅火災件数／住宅火災件数

市町村	死者発生 件数	住宅火災 件数	死者 発生率※ (平成30年)	死者 発生率※ (過去5年)
八王子市	0	51	0.0%	2.1%
立川市	0	32	0.0%	4.1%
武蔵野市	1	11	9.1%	6.9%
三鷹市	2	25	8.0%	2.8%
青梅市	0	11	0.0%	2.2%
府中市	0	23	0.0%	1.5%
昭島市	2	17	11.8%	5.8%
調布市	2	22	9.1%	6.3%
町田市	0	31	0.0%	5.0%
小金井市	0	15	0.0%	3.8%
小平市	0	12	0.0%	1.1%
日野市	1	17	5.9%	2.4%
東村山市	1	12	8.3%	3.6%
国分寺市	0	14	0.0%	2.2%
国立市	0	10	0.0%	0.0%
西東京市	0	12	0.0%	2.4%
福生市	0	7	0.0%	0.0%
狛江市	0	10	0.0%	2.3%
東大和市	0	8	0.0%	8.5%
清瀬市	1	13	7.7%	5.1%
東久留米市	0	10	0.0%	3.6%
武蔵村山市	2	6	33.3%	9.8%
多摩市	0	11	0.0%	4.5%
羽村市	0	5	0.0%	0.0%
あきる野市	0	6	0.0%	0.0%
瑞穂町	0	1	0.0%	0.0%
日の出町	0	2	0.0%	16.7%
檜原村	0	1	0.0%	0.0%
奥多摩町	0	0	0.0%	0.0%
多摩地区合計	12	395	3.0%	3.5%
合計	63	1484	4.2%	3.9%

3 区市町村別放火火災状況

区	放火火災 件数	総火災 件数	放火火災 の割合
千代田区	9	136	6.6%
中央区	9	115	7.8%
港区	13	193	6.7%
新宿区	16	179	8.9%
文京区	3	48	6.3%
台東区	17	96	17.7%
墨田区	11	80	13.8%
江東区	22	152	14.5%
品川区	18	130	13.8%
目黒区	9	70	12.9%
大田区	30	196	15.3%
世田谷区	23	188	12.2%
渋谷区	15	129	11.6%
中野区	10	86	11.6%
杉並区	9	98	9.2%
豊島区	10	112	8.9%
北区	22	99	22.2%
荒川区	11	59	18.6%
板橋区	35	131	26.7%
練馬区	22	126	17.5%
足立区	52	187	27.8%
葛飾区	30	129	23.3%
江戸川区	47	173	27.2%
特別区合計	443	2912	15.2%

市町村	放火火災 件数	総火災 件数	放火火災 の割合
八王子市	44	148	29.7%
立川市	11	66	16.7%
武蔵野市	1	30	3.3%
三鷹市	5	50	10.0%
青梅市	4	31	12.9%
府中市	16	65	24.6%
昭島市	10	40	25.0%
調布市	5	49	10.2%
町田市	35	108	32.4%
小金井市	5	28	17.9%
小平市	4	32	12.5%
日野市	24	49	49.0%
東村山市	13	38	34.2%
国分寺市	8	29	27.6%
国立市	7	22	31.8%
西東京市	6	27	22.2%
福生市	3	18	16.7%
狛江市	8	21	38.1%
東大和市	9	18	50.0%
清瀬市	4	26	15.4%
東久留米市	5	29	17.2%
武蔵村山市	4	22	18.2%
多摩市	12	45	26.7%
羽村市	0	13	0.0%
あきる野市	17	31	54.8%
瑞穂町	1	11	9.1%
日の出町	1	8	12.5%
檜原村	0	3	0.0%
奥多摩町	0	3	0.0%
多摩地区合計	262	1060	24.7%
合計	705	3972	17.7%

※総火災件数の合計は、治外法権1件を除く